教科書文庫
4
810
41-1927
2000090694

八波則吉編

現代國語讀本

(修正版)

五卷

東京開成館藏版

41427
教科書文庫
4
810
41-1927
20000
90694

教科書文庫
4
810
41-1927
2000090694

文部省檢定
昭和二年二月十五日　中學校國語科用

八波則吉編

現代國語讀本

（修正版）

広島大学
教
90694
図書

東京　開成館藏版

広島大学図書
2000090694

資料室
4a
810
HB2

現代國語讀本　卷五

目次

一　櫻花……笹川臨風……一
二　愛花愛國……四
三　保津川下り……夏目漱石……一三
四　太陽の言葉……島崎藤村……二〇
五　太陽と日本國民（詩）……正富汪洋……二五
六　松江の朝……小泉八雲……二八
七　小泉先生の舊居を訪ふ……厨川白村……三六
八　新綠の野……安倍能成……四八
九　鐘樓守（詩）……井上康文……五四

一〇 五重の塔（自修文）……幸田露伴……五七
一一 薩摩守の都落……（源平盛衰記）……六一
一二 性格の人平忠度……高須芳次郎……六六
一三 光陰矢の如し……貝原益軒……七三
一四 進學……室鳩巣……七四
一五 日誌の一節（自修文）……七七
一六 友の溺死……七七
一七 京都見物……八〇
一八 東京（詩）……與謝野寛……八五
一九 明治から大正へ……德富健次郎……八八
一九 田園雜感……吉村冬彦……九九
一九 夏……大谷繞石……一〇九
一 新緑……一一
二 小雨……一一
三 夕立晴……一一三
二〇 睡蓮（候文）……五十嵐力……一二四
二一 或過失（自修文）……小酒井不木……一二九
二二 近代の和歌（和歌）……一三七
二三 博雅の三位……（今昔物語）……一三〇
二四 鬼作左……新井白石……一三五
二五 一茶雜感……相馬御風……一四二
二六 女流の俳句（俳句）……一四八
二七 山岡鐵舟（自修文）……（山岡鐵舟）……一五二
二八 全生庵（詩）……兒玉花外……一七四
二九 幕末論……福地源一郎……一七八
三〇 空行く雁……（曾我物語）……一八五

三一 聖上崩御……一八九

現代國語讀本 卷五

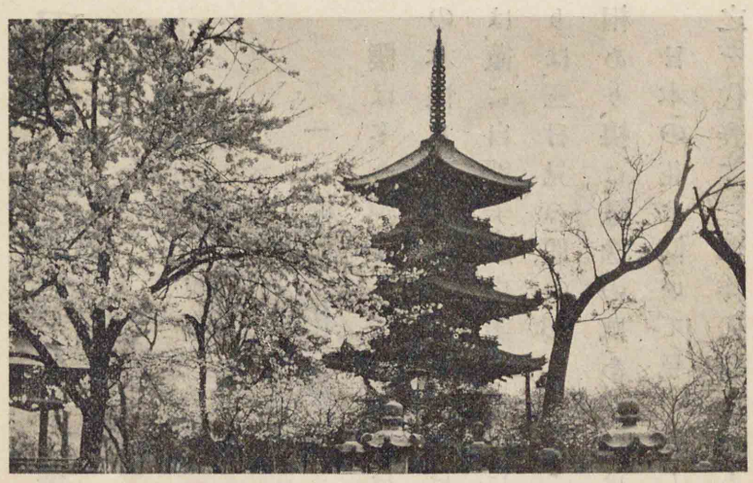
笹川臨風（名は種郎、東京市の人、明治三年生、歴史家、文學博士）

三日見ぬ間世の中は三日見ぬ間に櫻かな（大島蓼太）

一 櫻花（論文）

櫻は多きがよし。淋しきはその特色にあらず。賑かなるがその本性なり。この點に於ては東京の花を推すべく、京都・奈良の花は、僅に自然美・歴史美の點綴に止まれり。盛者必衰の理を示すよりは、三日見ぬ間の櫻なるをこの花の本色とすべし。蓮に厭世の相あり、梅に隱逸の風あり、櫻は樂天的にして、また現世の相を現す。

日本の花は仰いで見るべし、多くは樹木の花なり。櫻最もよく之を代表す。西洋の花は俯して愛するもの多し、大抵は草の花な

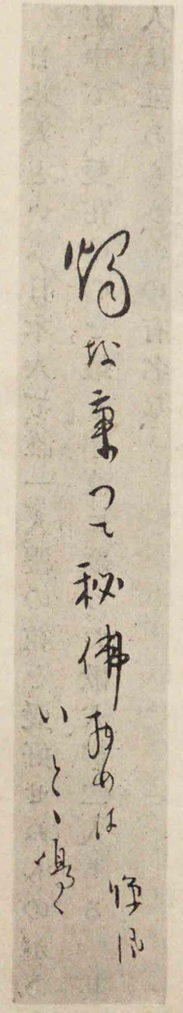


東京市上野公園の櫻

り。仰ぐものは天空海濶の意氣あり、俯するものは沈思瞑想の風姿あり。一は概括的、一は考察的なり。櫻の色は澹泊にして、紅ならず、白ならず、西洋草花の濃紅・濃紺のものと同じからず。彼は極彩色なれども、此は淡彩なり。東西嗜好の差、火を睹るよりも炳かなり。

櫻は簇生的なり、團結的なり、國家的なり、雲の如く、霞の如し。他の個人的の花と異なり、日本國民的なり、その開落の速にして些の未練氣をも止めざる、飽くまでも武士的なり。梅の時候は寒く、藤・牡丹の時候は暑し。櫻と菊とは時の最も佳なるもの、しかれども、菊の後には霜あり、雪あり、冬枯あり、凩あり、金風蕭殺として、絶えて希望なく快活なし、故に隱逸・遯俗の風あり。櫻の最もよき時候にぱつと開くに若かず。

櫻は鉢植として面白からず、生花として妙ならず。櫻は既に室内のものにあらず。これを觀るに最もよきは、その朝日に匂ひ出でたる戸外にあり。その本色は飽くまでも快活なり、飽くまでも春なり。（明治大正時代文範）



臨風筆蹟

燭を乘つて祕佛拜めばいとゞ鳴く　臨風

笹川臨風自署

二　愛花愛國

來山

小西氏、大阪の俳人、享保元年（一七二六）歿、年六十三

花咲いて死にともないが病かな。

日本人といふ日本人で、誰一人櫻の花を愛好せぬものがあらう。が、中でも、愛花の心を最も率直に歌つた歌人が二人ある。其の一人は誰あらう、あの有名な、

敷島の大和心を人問はば、
朝日に匂ふ山ざくら花。

本居宣長

伊勢國の人、江戸時代後期の國學者、享和元年（一八〇一）歿、年七十二

の作者鈴屋翁本居宣長その人である。

鶯の聲聞きそむるあしたより、
待たるゝものは櫻なりけり。

歌に何等の技巧はないが、花を待つ翁の心がよく現れて居る。さて、花を見ては、

山櫻花見る時は我が宿の
とさへ言つて居る。
世にあれば今年の春の花も見つ、
あだし木草は植ゑじとぞ思ふ。

本居宣長

寛政光格天皇の年號（一七八九―一八〇一）

うれしきものは命なりけり。

樂世間的な翁の面目が躍如として居る。翁の著作に「まくらの山」と題する櫻花三百首の吟がある。これは翁の晩年――晩年と言ふよりは臨終と言つた方が適して居るかも知れぬが――即ち寛政十二年の秋から冬にかけて、老の寢覺の心やりに、櫻花に對する執着心を三十一文字に寫したもので、其の翌年、七十二歳で永眠したのである。三百首を通讀すると、如何に翁が、此の日本の花――櫻に愛着してゐたかが察しられる。試に其

の二三を擧げよう。

我が心休む間もなく使はれて、
春はさくらの奴なりけり。

蕪村の「菊作り汝は菊の奴かな。」にも似通つて面白い。

かくながら千代も八千代も見てしがな、

さくらも散らず我も死なずて。

理想は理想として、現實の老衰が日に〳〵逼る。

死なば我又いつの世に廻り來て、
飽かぬ櫻の花は見るべき。

遂に一道の光明を認めた。曰く、

蕪村（與謝氏、本姓は谷口、攝津國の人、江戸時代後期の俳人、天明三年歿、年六十七）

しきしまのやまと心を人とはゞ朝日にゝほふ山ざくらばな　宣長

宣長筆蹟

櫻花飽かぬ此の世は隔つとも、
咲かば見に來ん天翔りても。

翁の歌に取るべきものは其の氣魄である。

類なき櫻の花を見ても知れ、
我が大君の國のこゝろを。

世の人は見ても知らずや櫻花、
あだし國には咲かぬ心を。

見よ、厭世思想嫌ひな、また異國風嫌ひな――今日の言葉で言へば、現實的な、國家主義的な――翁の思想が、如何にこれ等の歌に横溢して居るかを。

櫻には心もとめて後の世の
汝が國に此の花ありやと唐人に、

櫻を見せて答聞かばや、

歌としての絶對價値は兎も角、熱血男子の高唱すべき吟ではないか。翁また詠ずらく、

世は清く捨てたる人も捨てかねて、
見るは櫻の花にぞありける。

これは蓋し暗に西行法師を諷したものらしい。

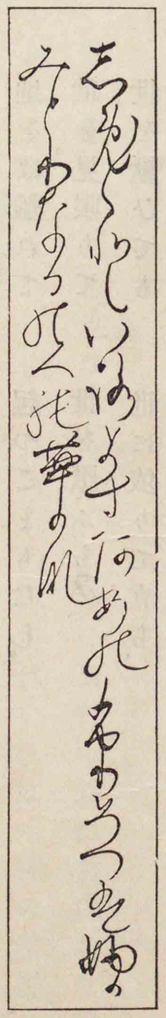
西行法師もまた愛花の心を最も眞面目に歌つた歌人の一人である。法師が「花の歌あまた詠みける。」と題する中に、

花に染む心のいかで殘りけん、
捨てはてしきと思ふ我が身に。

西行法師

しめ〳〵といろますあめのふりそへばふかみどりなるのべの草かな

雪の降る日
捨てはてて身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ（西行法師）



西行筆蹟

といふのがあるが、正に「雪の降る日は寒くこそあれ。」と言つたやうに、所感を其のまゝ歌にした法師の聲である。法師は二十三歳といふ血氣盛りに髪を剃つて、七十三歳まで都合五十年間を行脚で暮らした、我が國では先づ理想に近い世捨人である。けれども、此の世捨人が花に染む心ばかりは捨てかねて、愛着の末、

願はくは花の下にて春死なん、
其のきさらぎの望月のころ。

とさへ詠じたのである。所願が叶つて二月十六日に死んだ。偶然とは思へない。

佛には櫻の花をたてまつれ、

露伴
幸田成行、東京市の人、慶應三年生、文學者、文學博士

我が後の世を人とぶらはば。

これが法師の遺言である。權家に諂はず、聞達を求めず、貧苦に甘んじ、缺乏に安んじて、一生を羈旅に送つた西行法師は、畢竟するに立派な日本男子であつた。彼を評して「小主觀の偏見に住して、迷悟の間に彷徨す。」と言つた人があるが、或は當つて居るかも知れない。少くとも彼は花に執着の心を殘した。併し、こゝが彼の尊い所で、今も我等に愛慕される所以である。露伴の「出廬」に次のやうな句がある。

地に躓きて　倒れたるもの、
地をあだみても　地に依りて起ち、
地をば離れて　起つこともなし。
世を見限りて　世を厭ふもの、
世を厭ひても　世に依りて立ち、

日露戰役
明治三十七八年戰役

天晴地明
露伴道人

世をば離れて　立つこともなし。

然り、徹底した厭世は即ち死である。自殺の外に徹底した厭世のあらう筈はない。由來日本人の厭世はいはば一種の道樂に過ぎない。が、それで宜しい。これが日本人の強い所だ。人の世の塵を離れて、ひたすら詩の神ばかりを齋き祀る小廬の主人が、日露戰役の際、子供の歌ふ軍歌を聞いて、

我が骨宿す　櫻の香、
我が骨宿す　生れ來て、
やまとの民と

幸田露伴筆蹟

やまとの國に　身は老いぬ。
幾歳　花の　蔭に立ち、
幾歳　花の　香に醉ひぬ。
骨は櫻の　香に染みて、
花の生命と　我契る。
生きてやまとの　民となり、
死して櫻に　慚ぢざらん。
願は骨に　染めるぞや。
見よ、我死なば　我を焚け、
煙　櫻の　香もあらん。

と歌つて起つた。起つて直ちに小廬を出た。此の詩人の心が「出廬」の作者露伴博士の心であつて、即ち愛花詩人西行法師の心で、取りも直さず我が愛國詩人本居宣長翁其の人の心である、否、これが

夏目漱石名は金之助、東京市の人、文學者、東京朝日新聞社員、大正五年歿、年五十

我等櫻花國の國民七千餘万の心であるのだ。

三　保津川下り

夏目漱石

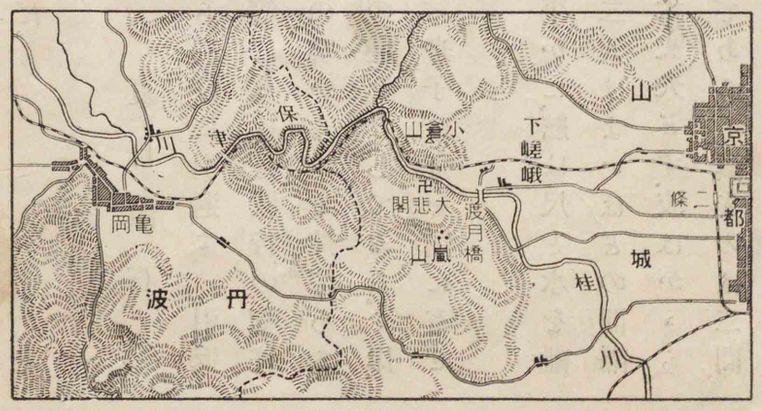
浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨から二條に引返す。引返さぬのは、山を貫いて丹波國へ抜ける。予等二人は丹波行の切符を買つて、亀岡に降りた。保津川下りはこの驛からする掟である。下るべき水は眼前にまだ緩く流れて、碧油の趣をなしてゐる。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生えてゐる。舟子は舟を渚に寄せて客を待つてゐる。

「妙な舟だな。」と友がいふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れてゐない。赤い毛布に煙草盆を置いて、二人はよいほどの間隔に座を占める。「左へ寄つてゐやはつたら大丈夫どす、波はかゝらしまへん。」と船頭がいふ。船頭の數は四人である。眞先のは二間

の竹竿、續く二人は右側に櫂、左に立つ一人は同じく竿である。

ぎい〳〵と櫂が鳴る。粗削に平げた樫の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸みを持たせたのは、兩の手にむんずと握るたよりである。握る手の節の隆いのは、眞黒いのは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせたやうに見える。藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓みでもすることか、強いうなじを眞直に立てたまゝ、藤蔓と摺れ、舷と摺れる。櫂は一搔毎にぎい〳〵と鳴る。

重なる水の逼つて行く頭の上には、山城



を屏風と圍ふ春の山が聳えてゐる。逼つた水は是非なく山と山との間に入る。帽に照る日の忽に影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀨はこれからである。

「愈、來たぜ。」と、友は船頭の體を透かして、岩と岩との逼る間を半町の向ふに見る。水はどうと鳴る。

「なるほど。」と、予が舷から首を出した時、船ははや瀨の中に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つたのは竿を横たへたまゝである。傾いて矢のやうに下る船は、ど、ど、どと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壞れるなと思うた時には、もう走る瀨を拔けだしてゐた。

「あれだ。」と、友が指す後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を、万顆の珠が我がちに奪ひ合つてゐる。

保津川下り

「壯快なものだ。」と、友は大いに御意に入つたらしい。併し、船頭は至極冷淡で、ひたすら櫂を動かし來り竿を操り去る。通る瀬は樣樣に廻る。廻る毎に、新たな山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數へる遑を行客に許さぬ疾い流は、船を驅つてまた奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に打當つて碎け散る飛沫を、春寒く腰から浴びて、緑の崩れる瀬の眞

中に、舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途にこの大岩を目懸けて突當る。渦卷いて去る水の、岩に裂かれた向ふは見えぬ。岩に突當つて碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方にどつと落ちて行くか。舟はたゞまともに進む。

「當るぜ。」と、友が腰を浮かせた時、紫の大岩は、早くも船頭の黑い頭を壓して突立つた。船頭は「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎けるほどの勢で波を呑む岩の太つ腹に潛り込む。横たへた竿を取直して、肩より高く兩の手が擧るとともに、舟はぐうと廻つた。突離す竿の先から岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向ふへ落出した。

急灘を落ちつくすと、向ふから空舟が上つて來る。竿も使はねば、櫂は無論のことである。岩角に突張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に長々と谷間傳ひを、根限り戻舟を

牽いて來る。水行く外に尺寸の餘地さへも見出し難い岸邊を、石に飛び岩に這うて、草鞋のめり込むまで腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は、堰かれて注ぐ渦の中に、指先を浸すばかりである。うんと踏張る幾世の金剛力に、岩は自然と磨滅つて、引懸けて行く足の裏を、やすやすと受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上にわたしたのは、牽綱を容易に且疾く滑らせるための策だといふ。

「少しは穩になつたね。」と、予は左右の岸に眼を放つ。踏む角も見

夏目漱石筆蹟

えぬ切立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁々と響く。黑い影は空高く動く。友も手を翳し、喉佛を突きだして峯を見上げ、「まるで猿だ。」とは言つたが、馴れると何でもするものだよ。」と、別に感心したらしい顏付でもない。予は幾分心に餘裕が出來て、「この流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに曲つてゐる。だから、處々にかういふ場處がないといけない。」と言ふと、友は即座に「僕はもつと駛りたい。どうも先刻の岩の腹を突いて曲つた時など、實に愉快だつた。願はくは、船頭の竿を借りて、僕が船を廻したかつた。」と腕を撫でる。「君が廻せば、今頃はお互に成佛してゐる時分だ。」二人は哄笑する。

亂れ起る岩石を左右に繞る流は、抱くが如くそと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似た曲線を描いて、岩角をゆるりと越す。川は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と、長い竿を舷の内へ差込んだ船頭が言ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を滑るやうに拔けだすと、左右の岩が自ら開けて、舟は大悲閣の下に着いた。（漱石全集）

四　太陽の言葉

島崎藤村

島崎藤村、長野縣の人、名は春樹、明治五年生、文學者

高輪御殿山、東京府品川町東海寺の北にある丘陵

「お早う。」と、私は太陽の隱れて居るところへ行つて聲を掛けて見た。返事がない。今日も太陽は引込みぎりだ。

少しばかり自分の記憶にあることを此處に書きつけよう。太陽の美しさが始めて私の眼に映つたのは、日の出の時ではなくて、寧ろ日沒の時だつた。私はまだ十八歳の少年だつた。當時の私の周圍には、ごく漠然とした自然の愛を敎へてくれる人はあつても、たゞ一語「あの太陽を見よ。」と、指さして言つてくれる人はなかつた。私は沈んで行く夕日を高輪御殿山の木立の間に見つけて、そ

仙臺の方へ第二高等學校講師として

の驚と歡とを分つために、一緒に山遊びに出掛けた友達の方へ走つて行つたぐらゐだ。私は友達と二人で、美しい日沒を望みながら暫く其處に立盡したが、あの時の私の胸に滿ちて來た驚と歡とは今だに忘れずに居る。

それにも增して忘れ難いのは、始めて私のなかに太陽の昇つて來たことを感づいた時だ。青年時代の私の生涯は艱難の連續で、ほと〳〵太陽の笑顏を仰ぐこともなしに多くの暗い月日を過した。稀に私の眼に映るものはと言へば、何の暖かみもなく、何の生氣もなく、たゞ朝になれば東の空から出て、晩には西の空へ沈んで行くやうな、紅いしよんぼりとした日輪だつた。私が二十五歳の青年の時だ。私は仙臺の方へ淋しい旅をして、その時始めて自分のなかにも太陽の昇つて來る時のあることを知つた。

日光の饑――私のこの要求は可なり強いものだつたと見えて、

誰か舊き生涯に安んぜんとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

島崎藤村筆蹟

明けさうで明けない薄暗闇が續きに續いて行つた時には、私もひどくがつかりした。私は幾度か太陽を見失つたこともある。太陽を求める心さへ時には薄らいだこともある。太陽は、私から離れて行つて、たゞ〳〵無意味な、悲しく痛ましげな顔付のものだとばかり私の眼に映つたこともある。

けれども、一度自分のなかにも太陽の昇つて來る時のあることを知つた私は、幾度となく夜明を待受ける心に歸つて行つた。毎年五個月の長い冬の續く信濃の山の上からも、新開地らしい東京

誰か舊き生涯に安んぜんとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

藤村

の郊外の畠の間からも、日の出を町の空に望むのにいゝ隅田川の岸からも、私は夜明を待續けた。それば かりではなく、長い年月の間には、私も異郷の旅人となつたことがあつて、紫色の泥かとも見まがふ遠い海の下からも、見るからに夢のやうな青い燐の光の流れる熱帶地方の波の間からも、それからまた、石造の建築物も冷たく、並木も黑く、万物は皆凍り果てたやうな寒い異郷の町の中からも、私は夜明を待續けた。そして、遠い日の出を夢みながら、故國を指して歸つて來たこともあつた。

私は三十年餘も待つた。恐らく、私はこんな風にして、一生夜明を待暮らすのかも知れない。しかし、誰でも太陽であり得る。私達の急務はたゞ〳〵眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等のなかに高く太陽を掲げることだ。この考は年と共に深く私の小さな胸のなかに根を張つて來た。今の私が想像する太

今年
大正十三年

陽は、もう餘程の年齢のものだ。物心がついてからこのかた、私が知つて居るだけでも、太陽の齢は今年五十三にもなる。その私の知らない以前の齢を加へたら、あの太陽が何程の高齢な老年だか、ちよつとそれを言つて見ることも出來ない。

人が五十三ほどの年頃になれば、衰へないものはごく稀だ。髪は年毎に白さを増し、齒も缺け、視力も衰へ、曾て紅かつた頰にも白い岩壁の面のやうな皺が刻まれる。其處には附着する苔のやうな皮膚の斑點さへ生ずる。多くの親しかつたものも次第に死んで行つて、思ひがけない病と、晩年の孤獨とが人を待つて居る。この私達の力弱さに比べたら、太陽のことは想像も及ばない。絶間のないあの行進と、あの踊躍。夜毎の沒落はやがてまた朝紅の輝にと進んで行くあの生氣。まことの老年の豐富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが最も若

散文
詩＝感激

正富汪洋
夕は由太郎、岡山縣の人、明治十四年生、詩人

いといふことには、私は心から驚かされる。

「お早う。」と、また私は聲を掛けて見たが、返事がなかつた。しかし、私はこの年になつて、また自分のなかに甦つて來る太陽のあることを感づくところから見ると、どうやら夜明も遠くないやうな氣がする。（春を待ちつゝ）

五　太陽と日本國民

わが國を表象するものは
世界を遍く照らす
燦然たる太陽

わが國民の理想は
高照りわたる

正富　汪洋

唯一無比の太陽

國の名は日本
男子の称は日子（ひこ）＝彦
女子の称は日女（ひめ）

日の丸の國旗は
そもゝ世界に
何を意味する

國民よ皆
日の威厳と日の公明と
日の德澤と日の愛情を保て

日は利己的でない
日本は利己的でない
そこに大同化の偉力がある

日は輝いて萬物を燿かす
日本の國民は輝いて
普（アまネク）く他を燿かす

我等は他動的
我等の使命は
世界の幸福增進

我は言ふ　我等の祖先の
常に抱いた大理想を
揚げよ行へよ太陽の子よと

六　松江の朝

小泉八雲

小泉八雲　本名はラフカディオ、ハーン（Lafcadio Hearn）、我が國に歸化した英國人、文學者、東京帝國大學講師、明治三十七年歿、年五十五

洞光寺　松江市にある曹洞宗の寺

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底で緩やかな大きい脈が搏つやうに響いて來る米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れて來るのが、日本人の日常生活に伴ふ有らゆる音響の中で、最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。それから、禪刹洞光寺の大きい鐘が、ごうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて、私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、「大根やい、蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」と呼ぶのが聞える。

大橋川　松江市を貫流する川

宍道湖　島根縣、八東郡の內海、東西四里、南北一里半

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の庭から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに、朝景色を眺めやる。

大橋川の幅廣い鏡のやうな河口が、遠くの方でわないくやうに万象を映寫して、微に光つてゐる。この川は宍道湖に向つて口を開いてゐる。湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。

對岸の家屋はまだ戸が皆締まつてゐるので、ちやうど箱を閉ぢたやうである。夜は明けたけれども、日はまだ出ない。遙に見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くた

なびいてゐる。その星雲狀をなした長い帶は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのないものには、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峯から峯へ、はて知らぬ長さの紗のやうに、横に延びてゐる。だから、湖水は實際より遙に大きく、昧爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霞の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帶の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして、霞が立つに連れて、その趣はそがろに變つて行く。朝日の黄色な緣が見えて來ると、今までのよりは更に强い細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受けて、水の彼方にある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で、蒸氣の立つ黄金色へと變る。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並んでゐる長い木造の大橋の彼

市江松

松江市は山陰第一の都會で、島根縣の東北部に在る。宍道湖の東岸に沿ひ、湖と中海とを連ねる大橋川に跨つてゐる。東西二十九町餘、南北一里。慶長十六年堀尾吉晴が居城をこの地にトし、地勢が吳の松江に似てゐるので松江と命名した。寛永十四年堀尾氏が國除かれ、松平直政が代つてこの地を治め、爾來明治に至るまで松平氏の城下であつた。廢藩の際一時衰微したが、やがて縣廳その他の諸官衙・諸學校が設置されて次第に殷盛に赴き、殊に山陰鐵道が開通して以來市況が頓に活氣づいた。

方に、一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にぼやけた船の精靈である。しかし、この精靈は雲と同樣、朝日の光線を受けて、薄靑い光の中で金色に震へてゐる。

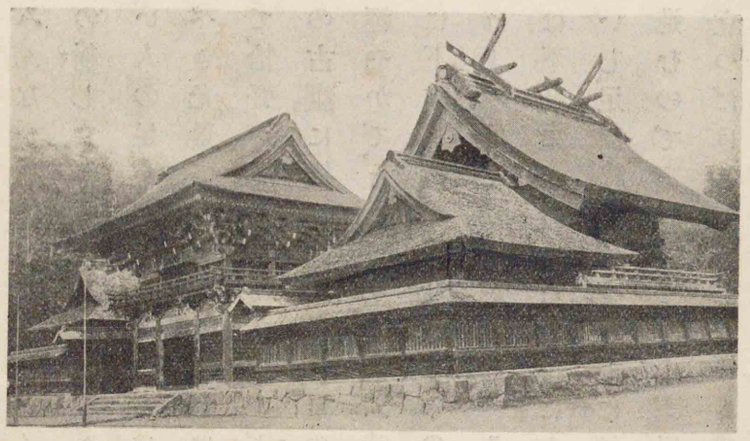
庭先の川端から、手を拍つ音が起つて來る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。銘々に小さな靑手拭を帶に挿んでゐて、

松江大橋

顏と手とを洗ひ、口を漱ぐ。　これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。　それから顏を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響のやうに出て來る。　あの頗る異樣な恰好の船の上からも、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐる。　最早拍手の數が增して殆ど鋭い音響の連發となつた。　それは人々が、今、皆、朝日即ち天照大神お日樣――天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴い日の造主よ。　この心地よい日光を賜うて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。　朝日に向つてだけ手を拍つものもあるが、大概は西の杵築の大社へ向つてもさうする。　顏を東西南北へ向けて、群神の名を小聲で唱へるものさへ隨分ある。　天照大神を拜んだ後、一畑山の高峯を眺めて、盲人の眼を開き給ふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は

大社　島根縣杵築町にある官幣大社出雲大社

一畑山　松江市の西方約六里、こゝに一畑寺がある

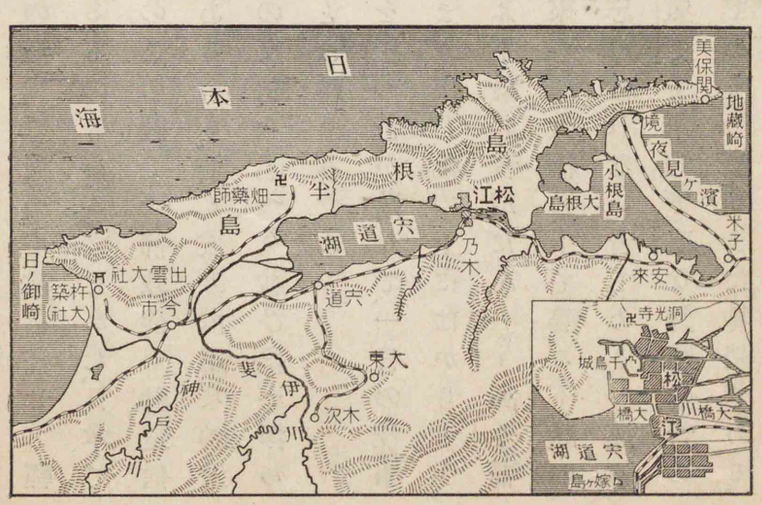


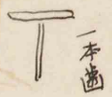
出雲大社

佛教の儀式に隨つて、掌を合せて輕く擦るものもある。　しかし、日本で最古のこの國では、佛教徒も神道信者であるから、誰も彼も古風な神道の祈の文句を唱へる、「祓ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゐみため。」

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始まり出し、橋の上にはから〳〵といふ下駄の音がだん〳〵高く響いて來る。　大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。　速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。　實際また舞踏である。

みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれない人の足がちら〳〵するのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整（ひとしくととのふてゐる）を得てゐて、ギリシャ（希臘）（Graecia）の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかで、そして、足を運ぶ時、指を先に下す。實際下駄で歩くのにはこれより外に仕様がない。それは、踵（かと）は下駄にも着かねば、地（刀の横断面）にも着かないし、足は楔（クサビ）形の臺を前に傾けては進むのである。一足の下駄の上に立つだけでも、慣れないものには困





難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指とで挾んだ、前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きもせず、また下駄も脱げない。更に珍しいのは、大人が木履（ボクリ）で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかし、それを穿いた人は、まるで足に何も着けてゐないかのやうに、らく〳〵と濶歩する。

小泉八雲

小泉八雲自署

頓て、學校へ急ぐ子供達が出て來る。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏きをするやうに見える。親船は白色や黄色の大きな翼を擴げるし、埠頭の側で夜中（ヨナカ）眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐始める。（日本瞥見（ベッケン）錄）

七　小泉先生の舊居を訪ふ

厨川白村

厨川白村、名は辰夫、京都市の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授、哲學者、大正十二年歿、年四十四

山陰の古都松江は、今もなほ出雲神話を想はせる夢の都である。さうだ、美しい夢を見ながら眠るやうな夢の都である。自然の風景に厚く惠まれた宍道湖畔の水郷に、土地の人はうつら〳〵と夢の國を辿つてゐる。臨水亭といふ旅館の欄に倚つて、松江大橋、嫁が島、どこを眺めて見ても、思ひきつて暢氣なものである。凡べてがどんよりした沈靜な薄暮の氣に包まれて、今光明の國から去らうとする影を見るやうである。

こんなことを考へながらぼんやりしてゐる私を、突如として驚かしたものがある。まるで大地の底から今飛出した怪獣が吼えるにも似た凄じい聲が鼓膜を突く。叫ぶが如く、呪ふが如く、また唸るが如く、とても形容も何もしやうのない奇怪至極な聲である。暫く呆氣に取られて聽いてゐた私は、聲の止むのを待つて、「あれは

何です。」と傍人に訊いた。午砲の代りに午後の七時を報ずる警笛ださうである。途方もないことをやるものかな。これも慥に松江名所、――ではなく、名物の一つであらうか。

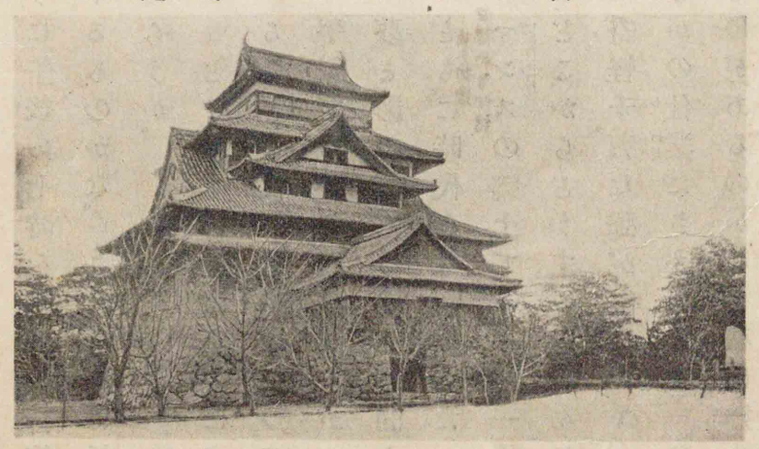
素戔嗚尊（松本楓湖筆）

どこでも普通は正午にすることを、夜の七時にやつて平氣でゐる松江は、さすがに夢と影の都である。時間とともに時代をも超脱したロマンス（夢物語、空想的な物語 Romance）の郷土である。一體どこからどうすると、あんな奇怪千万な聲が出るのかと訊くと、何でも市役所とか電燈會社とかの仕業ださうである。なるほど二十世紀だ、松江にもこんなものがあるのかなと、私は始め

て夢を破られた。松江の人達は日に一度づつ、あの怪物の聲によつて、夢の都の夢の生活から、無理やりに現代に引戻されてゐるのだらう。しかも引戻すその聲からして、既に素戔嗚尊の神話に出る八岐の大蛇の呻きのやうなのだから面白いと思つた。

夢と神話の出雲國の郷土から生れた民衆藝術に、「松江名所はかずかずあれど。」と數へた千鳥お城よりも、嫁が島よりも、更に遙に意義の深い名所が他に今一つある。それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人が

松江名所はかずかずあれど、千鳥お城に嫁が島（安來節）千鳥お城　松江城のこと、松江市の北部にある



松江城

殆ど顧みない名所である。否、松江の人さへ多くは知らない名所である。いふまでもなく、それは小泉八雲先生、――ラフカディオ、ハーン氏の舊居である。

日本を見物に來る西洋人の中には、日本人の全く知らない所をやつとのことで尋ね當てて、あの不便な山陰線の汽車に乘つて見に行く人が殊に近頃は多い。それどころか、はる〴〵太平洋の彼方から、先生の遺跡を訪ふためにばかり日本に來遊する外人もあるのである。米國で先生の全集刊行の擧があるに際して、松江時代の舊居の寫眞を

小泉八雲

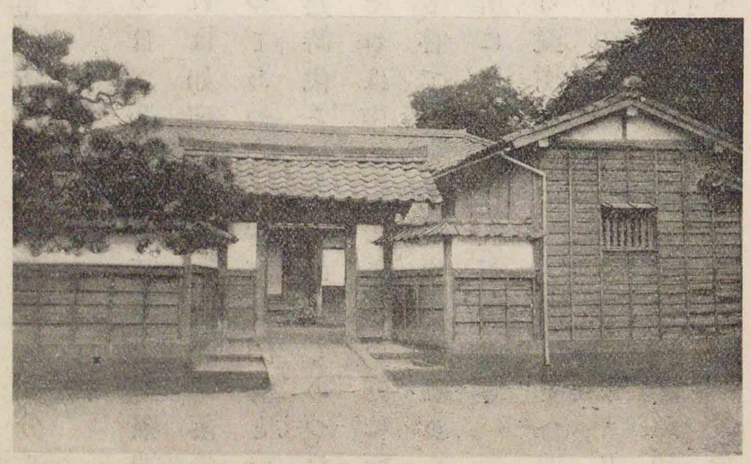
撮るために、かの國からわざ〳〵出かけて來た人さへあるではないか。

あの稀世の名文を以て日本を世界に紹介された先生の遺跡を保護しようともせず、先生の功に報いるに殆ど何事をも盡してゐない日本人の態度を見て、快からず思つてゐる西洋人の多いのは、誠に無理のないことだと思ふ。　先生にはあの十數卷の名著がある。　英語の滅びない限り、ラフカディオ、ハーンの文名は世界に不朽なのだから、その遺跡などを保護しようがしまいが、今は世にない先生のために寸毫の利するところはあるまい。　たゞ日本人として果してそれで濟むだらうか。　文藝の尊威を解しないことを世界に廣告して、恥だとも思はないのだらうか。　例へば、近松巢林子のやうな自國の文豪に對してさへ、その偉業を追慕するべく最近に新聞社が手を下すまでは、殆ど何一つしてゐなかつたではな

近松巢林子
名は門左衛門、本名は杉森信盛、長門國の人、江戸時代前期の淨瑠璃作者、享保九年（一七二四）歿、年七十二

いか。　關白とか將軍とかいふものを神樣あつかひにして、神社に祭り上げて拜んでゐる日本人は、嘗て一たびでも、詩人のために、藝術家のために、神社らしい神社を建てたことがあるだらうか。

あんな怪獸の吼えるやうな音響を工夫してゐる間に、松江の人達も少しはハーン先生の偉業を考へて見たらいゝだらう。　せめて「松江名所は。」と問はれて、小泉先生の舊居を旅の人に語り得るだけに注意してゐるぐらゐのことはあつて欲しい。

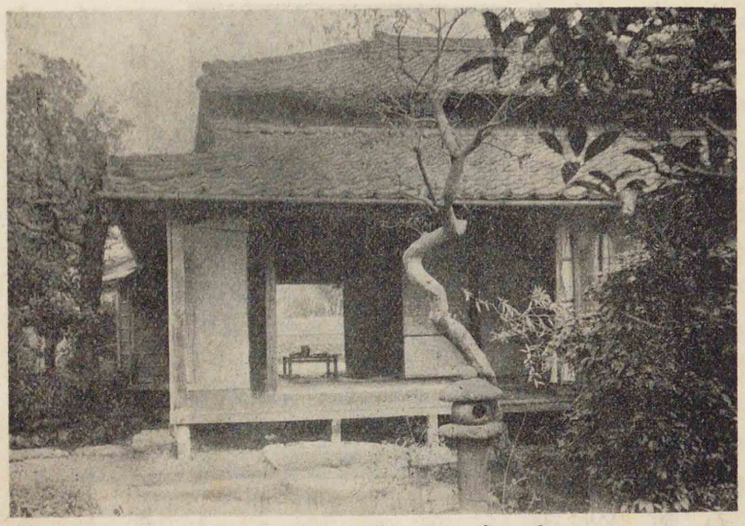


小泉八雲の舊宅

或觀光客はこれを縣廳に訊いても市役所に問合せても、遂に分らなかつたさうである。

城址の美しい青葉を照らす午後の日ざしが傾く頃、靜かな堀端の或家の門に私の車は停つた。それは如何にも侍の敗殘凋落の跡を想はせるやうな家中屋敷の一つであつた。古びた門構といひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代そのまゝの物であつた。正面の玄關の左方に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石も、嘗ては先生が飽かず眺められた物であつた。殊に縁側に近い所にある百日紅だの、珍しい老木の大木蓮だのは、先生の殊の外なる愛樹であつたと聞くさへ懷かしい。樹木の精ハマドライアッドの神話を語つた古代のギリシャ人のやうに、先生もまた草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或寺院の老木を一握の黄金

ハマドライアッド　樹の精、森の女神



小泉八雲の居室

に代へて、惜しげもなく伐倒さうとした俗僧を見て、ひどく怒られたといふ話がある。先生はその深い愛の生活、強大な感情生活の裡に、自然と人生と超自然との凡べてを抱擁してゐられた人であつた。

その次の間の十疊は、先生が樂しく起居された茶の間であつた。洋風の椅子などを用ひないで、座蒲團に坐り、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奥さんや來客と打解けて語

られたのはこの室であつた。この家の持主であり現在の主人である根岸さんは、私をこの部屋に通して、色々な話をされた。

日本に於ける先生の舊居の地としては、この松江の外に、熊本時代のもあれば、また現在未亡人の住まつてゐられる東京の大久保の邸もある。しかし、この出雲の地は、日本に歸化された先生に取つては特殊な意味がある。天外万里漂泊の孤客として、その頃はまだよく內情を世界に知られてゐなかつた遠い〳〵日本の、しかもまた山陰の片ほとり、夢と影の神話の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を娶られた。英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如としてこの地からあの最大な名著「日本瞥見錄」二卷を公にされた

厨川白村

根岸さん　名・磐井、松江市の銀行家

大久保の邸　東京市の西郊大久保町字西大久保にある

のである。作者は果して何處にゐる如何なる人ぞと、彼方の文壇の驚異となり、はては「ラフカディオ、ハーン」その人の實在さへ疑はれた時があつた。先生と同じく近世散文の巨匠であるロバート、ルイス、スティヴンスンも、故國スコットランド[蘇格蘭]を出てからは足跡が天下に遍く、米國のサンフランシスコで結婚して後、太平洋をさまよひ、はてはサモア島に世を終るまで、後の研究者はその足跡を辿るのに沒頭してゐる。私は松江に於ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるスティヴンスン終焉の地のやうに、今後は益々多くの文學順禮者の驚歎と好奇の念を惹くことだらうと思ふ。先生自らに於ても、その樂しいゆかしい思出と愛惜が殊に松江のこの家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學に轉任される途中、――まだ全く山陰地方に汽車の便のなかつた頃、――わざ〳〵廻路をして、この第二の故郷を訪はれ、「我が

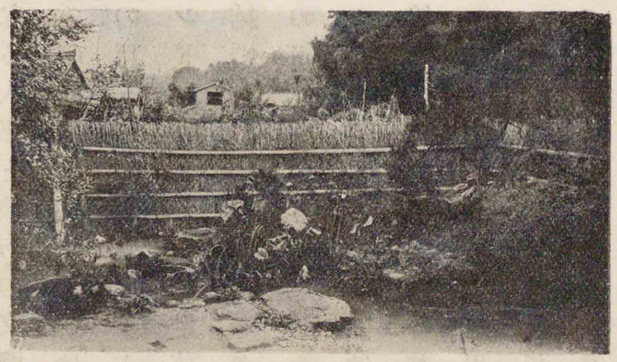
スティヴンスン（1850―1894）

サモア島　南太平洋中にある大小十四個の群島

家に歸つた。」といつて喜ばれたさうである。

この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつたといふ。凡べてが閑寂な、古びた、いかにも士族屋敷らしい空氣に滿ちた部屋である。障子を開けて緣側に出ると、そこの庭には小さな池があつて、眞中に一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前暫く模樣換してあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうである。庭の左の方にある土藏を指さしながら、根岸さんはいろ〳〵な話を聞かせられた。

「この池の中には隨分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとして、藏の後の方から蛇だの鼬だのが出て來たもんださうです。時々蛙が捕られると、哀れな悲鳴を揚げるので、その時は先生の一家が皆飛出して來て、大騷をしたと、奥さんが話されました。それで、先生は時々食殘りの肉を皿に入れて石段に置き、蛇や鼬に與へられました。『私が御馳走をしてやるから、蛙を捕ることだけはよしてくれよ。』と、先生はいつも言はれたさうです。」



小泉八雲舊宅の庭園

山中鹿之助名は幸盛、尼子氏の臣、天正六年（一五七八）歿、年三十六

さういふことを根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩ぽつぽや杜鵑の聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に引籠つて、瞑想もし、讀書もし、創作もされたのであつた。また正面遙か向ふの方に樹の間を洩れて見える山が山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聽いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部

一般

新緑が彼の心を引き

安倍能成
松山市の人、明治十六年生、哲學者、京城帝國大學教授

屋に歸つて座に着くと、もう人の顏がぼんやりするほどに仄暗かつた。私はこの夢の國に來て夢の家を尋ね得たことを喜びながら、暫くして辭し去つた。門前の堀の水は深く濁つて、青葉の夕の影を宿してゐた。

翌日私は京に歸る前、記念のために、松江の本屋で、〔獨逸〕ドイツ Deutsch で發行された廉價版（廉價にした版）の「たなばた物語」一部を求めた。これは、先生が雜誌などに載せられただけで、遂に未定稿のまゝ、まだ一冊の本には纏めないで世を去られた數篇を、先生の歿後に出版したものである。松江名物の大きな鮑貝を五つと、先生のこの遺書を家苞（イヘヅト）にして、私は夢と影の松江を去つた。（廚川白村集）

八　新緑の野

安倍能成（ヨシナリ）

新緑の野の景色は非常に僕の心を引く。目も覺めるやうな緑

充實を新緑から與へられる。

新緑に対する感激に充ちる。

の野は、晴れた日も、曇つた日も、雨の降る日も佳い。殊に晴れた日の朝、日のまだ高く上らぬ、空氣の清らかな、心の新しい時に、生命に充ちた新緑に對する心持は實に何とも言へない。僕は近年僕の生活になかつた充實（はりつめた氣持）を新緑から與へられてゐる。

新緑の梢を仰いで僕の胸の中に充ちる思は、一種の驚歎である、讃美である。新緑に對すると、僕の眼には何時しか涙が込みあげて來る。僕は何よりも、今年の新緑が、僕のこの四五年の生活に殆ど涸（かれ）てゐた悲哀の涙を復活させてくれる（かへらせてくれた）緣（ゑん）となつたのが嬉しい。若い楓の葉を透（とほ）して日光の洩れる時のやうな色調が、柔（やわらか）に僕の腸（はらわた）まで滲（し）みて來るやうな氣がする。爽涼（さうりやう）の感に濕潤（しつじゅん）の氣を缺かぬやうな一脈の悲みが、涙に少し熱（感情に興奮する）くなつた僕の眼邊（めんぺん）から、徐（じ）かに全身を廻つて行くやうに思はれる。靜かな、併しながら緊張した、充實してゐて而も寂しい悲哀である。自然の懷に抱かれて、人

若い自然の力の充ちてゐる新緑をすこしでも持續したい。

の世を厭はずに悲しむやうな心持である。新緑に催された涙を靜に胸に貯へて、頭を垂れながら晩春の野に樣々な冥想に耽るのは、心ゆくことである。

あゝ、若い自然の力！　新緑の野にはこの力が溢れてゐる。晩春の野を吹く風は、この若い力の包むに餘る歡喜を運びつゝあるかのやうに思はれる。風に搖らぐ樹々の梢に對しては、いつまでもこの刹那を持續したいといふ愛着が起る。僕はこの力を讃美したい。

新しい若芽が段々と硬くなり黑くなつて來るのは悲しいものである。花の散るのよりもこの方が大分惜しい。花は散るけれども、葉は殘つてゐるからかも知れぬ。樹々の葉の中でも一番この感じの多いのは櫻である。華やかな花の色に春の盛りを示したその梢は、眞つ先に現實的な夏の色となるのが果敢なく感じら

夢の氣持がない。

中野
東京府豐多摩郡中野町

れる。枳殼の芽の出たての色の若々しい新しい心持。あの固い木針も、その頃は指の押へるまゝに、柔に甘えたやうに頭を下げるのである。東京の近郊に木の多いのは何よりも愉快である。中野の停車場から出て、二三町も來て右手の方を見廻すと、水田の彼方に麥畑があり、その向ふにすぐ幾重の樹々の梢が見える。松の木がむらむらと集つた向ふに、山毛欅の淺綠色に成つてゐる。その新しい梢が高く聳えてゐる。その成はまたこちらに杉の林があると、その隣には竹藪がある。竹藪の新しい葉の色がこの頃は柔い潤ひのある茶褐色をしてゐる。要するに、新綠は佳い、實に佳い。たまらなく佳いと言つたら濟むのか知らぬが、それだけではまだ物足りない。僕はこの頃の新綠に對するとい

安倍能成

つも一種の感傷的な心持になつて來る。

公孫樹は面白い木だ。秋になつて、黄色い葉の梢に夕日を浴びた雄姿は格別だけれども、春の初、小さな芽があの大きな體軀に出て來た時分には、大男が尻のあたりで細い帶をちよこなんと結んでゐるやうな滑稽な所がある。柿若葉といふことをいふが、この頃の柿の葉の色は實に驚くべきものである。黄色の勝つた潤澤の多いあの若葉が、晩春の日を浴びて立つてゐる姿は、實に人の心目を惹く。櫟の木は平凡で、他の奇がないやうでゐて、なか〳〵捨て難い。この木の芽をふくのは、外の木よりは遲い。外の木が既に緑になつてゐる時分、やう〳〵この木は芽を出して來る。少し遠方から見ると、緑の色が僅に薄く櫟林に動いてゐる樣が、いかにも謙遜な、控目なやうに感じられる。この頃はもはや梢いつぱいの葉となつた。僕は日の光に青く透くこの葉の下道を、さら〳〵と梢を吹くこの頃の心持よい風に吹かれながら、搖らぐ葉影を踏んで行くのが愉快でたまらぬ。

幾叢の森に圍まれた麥畑の麥も、この頃は穗を出した。ずつと見渡すと、畑から、森から、緑の色の見えるあたりに、地の下からむらむらと力が溢れ出てゐるやうに感じられる。僕はこれを見ると、雪の上に轉ぶ兒狗のやうに、ころりと麥畑の上に引つくりかへつて見たいやうな無邪氣な心の躍るのを覺える。朝など少し薄暗い樹蔭の道を行く時、ふと傍の杉垣の黑色の中に、炉のやうに明るく新しい芽が去年の舊い葉の上に點々と出てゐるのを發見するのも一種の驚きである。垣の隙間から新しい筍が竹藪の中に生え出したのを見ても、何だか非常に珍しい新しい心持がする。

自分の實生活に對する一種の不安を感じて、いやな氣持を抱いて、この新緑の野に對した時、何故にこの美しい天地を外にして、く

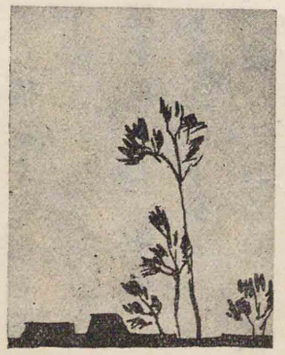
だらぬことを考へたり、したりするのだらうと思ふ。そして、自分は一生何物をも背負はずに、森から森へと漂泊して行つたらどうであらう、寂しい、そして悲しい心に、積り重なつた綠の梢から洩れる日の光を仰ぐ時の氣持はどうであらうなどと、空想を馳せても見る。自然の兒、人間は自然の兒であるべきものではあるまいか。嗚呼、自然の兒、いかに簡單で煩ひのない名よ。（山中雜記）

井上康文
名は康治、明治三十年生、神奈川縣の人、詩人

九　鐘樓守（しゅろうもり）

井上康文

小さな街の
鐘樓を守つて、
老いた夫婦は、
何十年か、
何百時か、

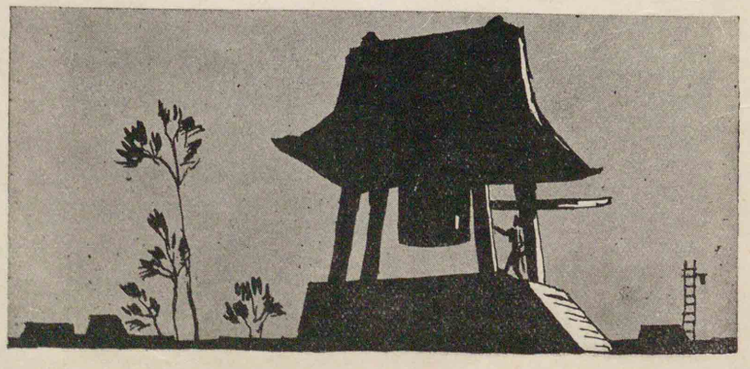


人々に時を告げた。

風の夜も、
闇の夜も、
鐘の音は
空に響き渡る。
晴れた蒼空に、
星の煌めく夜空に、
光とともに、
時は告げられる。

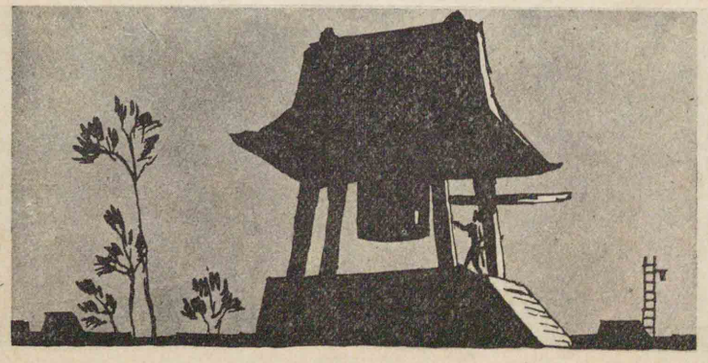
人々は働く、
親が子を愛しまた親を愛して
親と子の愛に働く。

天候をもつて「何時も」といふことを



人々は眠る、
團欒の中に、
暖い蒲團に眠る。
しかも、その時、
老いた鐘樓守の夫婦は、
街の人々のために、
世界のために時を告げる。

おう、今鐘が鳴る、
小さな街の空に、
人々の心の底に、
世界の果に響き渡る。（日本現代名詩集）



庫裡　寺院の台所

自修文　明治文學の巨

一〇　五重の塔（一年から）

理想　尾崎紅陽

幸田露伴（現在）

「五重の塔の、お願に出ましたは、五重の塔のためでございます。」と、藪から棒を突出したやうに尻もつたてて、聲の調子も不揃に、辛くも胸にあることを、額やら腋の下の汗とともに絞り出せば、上人思はず笑を催され、「何か知らねど、老衲をば怖いものなぞと思はず、遠慮を忘れてゆつくりと話をするがよい。庫裡の土間に坐り込うで動かずにゐた樣子では、何か深う思ひ詰めて來たことであらう。さあ、遠慮を捨てて、急かずに、老衲をば朋友同樣に思うて話すがよい。」と、飽くまで優しき注意。十兵衛脆くも梟と常々惡口受ける銅鈴眼にはや涙を浮めて、「はい、はい、はい、有難うございまする。思ひ詰めて參りました。其の五重の塔を、かういふ野郎でございます。御覽の通り、のつそり十兵衛と口惜しい綽名をつけられて居る奴

合點承知

でござりまする。併し、御上人樣、眞實でござりまする。仕事は下手ではござりません。知つて居ります、私は馬鹿でござります、馬鹿にされて居ります、意氣地のない奴でござります。虛誕はなかなか申しません。御上人樣、大工は出來ます。大隅流は子供の時から、後藤・立川二つの流儀も合點致して居りまする。させて、五重の塔の仕事を、私にさせていたゞきたい。それで參りました。川越の源太樣が積りをしたとは、五六日前聞きました。それから私は寢ませんは。御上人樣、五重の塔は百年に一度、一生に一度建つものではござりません。恩を受けて居ります源太樣の仕事を取りたくはありませんが、さても賢い人は羨しい。一生一度、百年一度の好い仕事を源太樣はされる。死んでも立派に名を殘される。あゝ羨しい、羨しい。大工となつて生きて居る甲斐もあられると いふもの。それに引換へ、此の十兵衞は、鑿・手斧もつては、源太樣に

だとて誰にだとて、万が一にも後れを取るやうなことは必ず必ずないと思へど、年が年中長屋の羽目板の繕ひやら、馬小屋・箱溝の數仕事、天道樣が智慧といふものを私には下さらないゆゑ、仕方がないと諦めても諦めても、拙い奴等が宮を作り、堂を請負ひ、見るものの眼から見れば、建てさせた人が氣の毒な程のものを拵へたを見る度毎に、内々自分の不運を泣きますは。御上人樣、時々は口惜しく、技倆もない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりまするは、御上人樣。源太樣は羨しい、智慧も達者なれば手腕も達者、あゝ羨しい仕事をなされ

つくねん　ぼんやり

るか。私はよ、源太樣はよ、情ない此の私はよと、羨しいがつい高じて、女房にも口きかず、泣きながら寢ました其の夜のこと、『五重の塔を汝作れ、今すぐ作れ。』と、怖しい人に吩咐けられ、狼狽へて飛起きざまに道具箱へ手を突込んだは、半分夢で半分現。眼が全く覺めて見ますれば、指の先を鐔鑿につゝかけて怪我をしながら、道具箱につかまつて、いつの間にか夜具の中から出てゐた詰らなさ。行燈の前につくねんと坐つて、嗚呼情ない詰らないと思ひました其の心持、御上人樣、解りまするか。えゝ解りまするか。これだけが誰にでも解つて呉れゝば、塔を建てなくてもよいのです。どうせ馬鹿なのつそり十兵衞は死んでも宜しいのでございまする。腰拔鋸のやうに生きてゐたくもないのですは。其の夜からといふものは、眞實、眞實でございまする、御上人樣。晴れて居る空を見ても、燈火の屆かぬ室の隅の暗い處を見ても、白木造の五重の塔がぬつ

なまじ　いつそ
述懷　おもふことを言ふこと

忠度　平忠盛の子、壽永三年（一八四）歿、年四十一
入道　平清盛、入道して淨海といふ

と突立つて私を見下して居りまするは。とう〳〵自分が造りたい氣になつて、迚も及ばぬとは知りながらも、毎日仕事を終へるとすぐに、夜を籠めて五十分一の雛形を造り、昨夜で丁度仕上げました。見に來て下され、御上人樣。賴まれもせぬ仕事は出來て、したい仕事は出來ない口惜しさ。えゝ不運ほど情ないものはないと私が歎けば、御上人樣、『なまじ出來ずば不運も知るまい。』と、女房めが其の雛形をば搖り動かしての述懷、無理とは聞えぬだけに餘計泣きました。御上人樣、御慈悲に、今度の五重の塔は私に建てさせて下され、拜みます。こゝこの通り。」と、兩手を合せて頭を疊に、涙は塵を浮べたり。（五重塔）

一一　薩摩守の都落

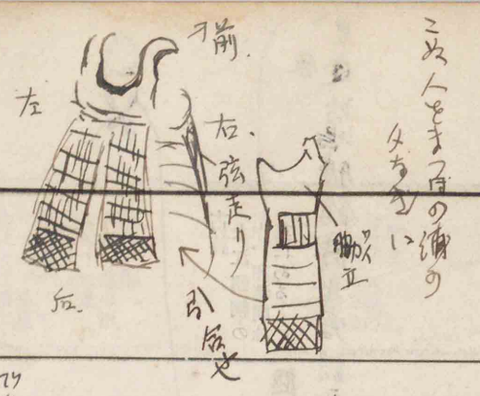
薩摩守忠度は入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りたりけるが、

千載集——後白河の帝

俊成　藤原氏、皇太后宮大夫、歌人、五條京極に住んでゐた、元久元年（一二〇四）歿、年九十一

郎等六騎相具して、忍びて都へ歸りのぼる。その時如法夜半のことなるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、亂れの世なる上、いぶせき夜半のことなれば、敲けども敲けども明けざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久しくありて、靑侍をいだし、戸を開かでこれを問ふ。「忠度と申すもの見参に申し入れたき事あり。」と答へければ、三位大

平忠度（尾形月三筆）



庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めに開きて對面あり。

忠度宣ひけるは「かゝる身として御爲憚りあれども、所詮一門榮華盡きて、都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り。亡びんこと疑なし。世鎭まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出して、川尻より忍び上つて侍り。これぞ年頃詠み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさんこと遺恨に侍り。之を砌下に進らせおき候。勅撰の時は必ず思召し出せよ。」とて、卷物一卷泣く〳〵鎧の引合せより取出したり。三位感涙を流してこれを受取り、「御詠一卷預りおきぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。」この怒劇の中に御音信に預ること、恐悅少からず候かな。た

とひ浮生を万里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は思ひ出し侍るべし。」と宣へば、忠度、「今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふこと無し。」とて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠。馳思於雁山之暮雲。
後會期無。霑纓於鴻臚之曉涙。

とうちあげ〳〵詠じつゝ、南を指してぞ落行きける。本文には「後會期遙。」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、「後會期無。」と詠じけるこそあはれなれ。三位もなごりの惜しくして、遙にこれを見送りて、あはれ、世に在りしには、この人どもにこそ詔ひ追從せしに、變る習とて、今は門を隔つることの悲しさよ。」と哀れなるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られける。

世鎭まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、「故郷の花」といふ題に、「よみ人知らず」とて、一首入れられたり。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山ざくらかな。

とよめる歌なり。名字をも顯し、あま

古詩
大江朝綱の作、和漢朗詠集にあるも

夏夜於鴻臚館餞北客詩序

平家の都落

千載集
後鳥羽天皇の文治三年（一八四）七後白河院の院宣によつて撰した

志賀の都
天智天皇の都し給うた處ながら長良にかけて、長良はいつた山は近江國にある

（春日權現驗記繪詞）

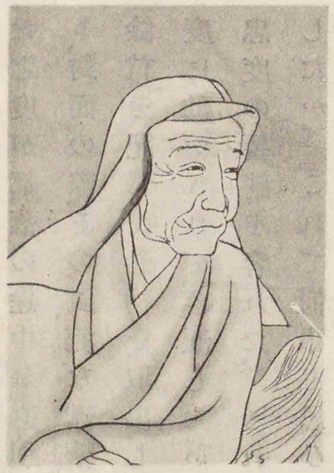
たも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、たゞ首ぞ入れられける。亡魂いかにうれしく思ひけん。あはれにやさしくぞ聞えし。（源平盛衰記）

一二　性格の人平忠度

高須芳次郎

人間の本性は、安易な平凡の場合よりも、寧ろ海嘯に襲はれたやうな非常の際に現れる。平忠度は、平家の公達の中で、多少異彩を放つてゐたであらうが、若し終生得意の時代に踏舞したなら、存外歴史の頁に色彩を加へなかつたかも知れない。或は單に詩歌の憧憬者として微かな存在を認められるに過ぎなかつたらう。併しながら、零落の暴風が吹荒んで、一門盡く住馴れた都を見捨てねばならない運命に陷るに及んで、その個性は自然にその頭を擡げ出した。彼には物事を衒つたり修飾したりすることは出來ない。

隨つて努めて他に異なつた色合を出さうとも何とも思はなかつたであらうが、平素沈潛してゐた氣分・調子が、異常の場合に遭逢して自然に發露したのである。このやうにして、彼は詩歌を作つたばかりでなく、その半生を詩化したのである。



藤原俊成

何故彼は俊成を訪れたか。當時俊成が歌集を撰ぶべき宣旨を承つたと聞いて、とても一生の思出に、一首でも入選の榮を得て、百世の後までも詩の讃美者である記念を留めたいと熱望したからである。兵馬倥偬の際、普通のものなら、勿論このやうな風流を敢へてするだけの餘裕があるまい。併しながら、忠度にあつてはこれが永遠の慰藉である。この目的さへ遂げれば、彼は安心して潔く戰死が出來

るのである。詩歌は彼の生命で、そして宗教であつたともいへよう。俊成は忠度のやうな複雑な道を歩む必要はない。たゞ詩歌に專念して居る人である、安らかな道を歩める人である。武裝した忠度が都落の途中から引返して、深夜俊成の門をほと〳〵と叩き、對面の際、その風流な襟懷を告げて、花やかな鎧の袖から、短歌百餘首を記した卷物を取出した時には、俊成も覺えずその熱烈な態度に動かされて、落涙しないではゐられなかつた。彼は嬉しげに忠度の要請を容れた。これを確め得た忠度は、いかに安心し滿足したか。「これで何事も思ひ置くことはありませぬ。」と、匆々暇を告げて門を出ると、ひらりと馬に跨つて、遙に西を指した。馬蹄の音が憂々と深更の靜けさを破りながら漸く遠ざかつて行く姿を、俊成は名殘惜しげに見送つた。折柄「前途、程遠し、思を雁山の暮雲に馳す。」と高らかに朗吟するのを聞いた。勿論それは忠度の凉しい

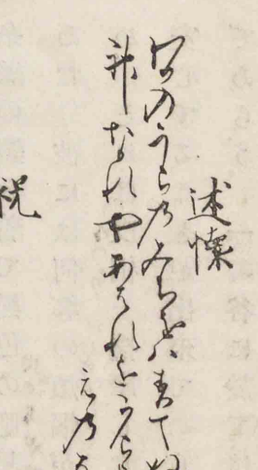
聲であつた。何たる瀟洒な襟懷であらう。彼の優雅な心の音樂は、嫋々として清韻を絶たないではないか。その後、忠度の歌は果して千載集に收めてあつた。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを、
昔ながらの山ざくらかな。

これが彼の名を不朽の頁に印したのである。

私は、靜に美しく沒落の都を去つた忠度を、再び一の谷に於ける西門の大將として見出した。その時の彼は、紺地の錦の直垂に、黑糸縅の鎧を着て、黑色の肥馬に沃懸地の鞍を置いて、悠然と跨つてゐた。彼には何等の煩惱がなかつたらうか、執着がなかつたらうか。それは、皮相を揣摩しただけでは解らないが、歌の卷についてであらう。一の谷に於ては決死の覺悟を以て城郭を守つた。併

一の谷　攝津國西南部の古戰場



述懷

わかのうらのみちをばすてぬ
神なれやあはれをかけよすみの
えのなみ

祝

よものうみものどかなれとぞ
すみよしのつもりのうらに
あとをたれけん

しながら、源軍の突飛な戰術に逢つて、味方は意外の亂脈に陷り、いかに勇猛な藤原忠度も、たゞ一人止まつて後くつれる頽瀾を喰留める譯には行筆硯煙草かなかつた。看す〳〵敵に後を見せるのは殘念であるが、行ける處まで行かうとは彼の志であつたらう。

忠度は敵の重圍を切拔けて、急がず、騷がず、徐ろに落ちて行かうとした。忠澄は後から追付いて、「あれはいかに、よき將軍と見奉る、返させ給へ。」と呼掛けた。忠度は輕く受流して、「私は味方の者

忠澄　岡部氏、通稱は六彌太、武藏國の人

ぢや。」と、事もなげにいつてのけたものの、鐵漿黑々と染めた齒に目を付けられては、最早免れることが出來ない。源軍には美しく齒を染めた風流の士は一人もゐないからである。忠澄は進んで馬を押並べて、むずと忠度に組みついた。この公達思の外に手剛である。却つて忠澄を捻伏せて、前後三回、刀を以て刺したが、鎧の上とて切尖が通らない。思はずも時を費すところへ、忠澄の家來がいきせき駈付けて、忠度の右腕を斬落した。不意の打擊に逢つて、流石勇猛の貴公子も、「今はこれまで。」と覺悟して、一氣に忠澄を投げのけて、西へむかつて觀念した。「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨。」と高らかに唱へる後から、刀光一閃、忠度の首級は地に落ちた。

忠澄は不思議にも危機一髮の際に臨んで、家來に助けられ、辛うじて好い敵の大將を討取つたが、まだ何人であ

高須芳次郎

高須芳次郎自署

るか解らない。ふと箙に結び付けられた文に目をつけて披見すると、「旅宿花」といふ題で、

行きくれて木の下蔭を宿とせば
花や今宵のあるじならまし。

と記してあるのを見て、始めて風流貴公子の名のある忠度の最期と知つた。忠度はその最期まで詩歌の故郷を忘れなかつたのである。この場合、彼は靜平な怡悅の情を以てその精神の故郷に歸るのを自覺したであらう。

忠度がその死を惜しまない態度といひ、敵を捻伏せた力量といひ、優に知盛・敎經と列ぶことが出來る。彼の優雅な外皮の中には、沈着剛毅な血が循環してゐたのである。併しながら、たゞこれだけなら、その色彩は單純であつた。これに加へるのに、詩歌の愛慕を以てしたために、色彩が豐になり複雜になつて、そこに性格の人

知盛　平清盛の子、大納言、勇名があつた、壇の浦の戰に歿した。三十四

敎經　平敎盛の子、能登守、壇の浦の戰に歿した。二十四

忠度を見出すのである。（平家の人々）

一三　光陰矢の如し

貝原益軒

梓弓春立ちしより年の暮、行くまで、射るが如くに思ほゆれば、時日の早く過行くは止めあへず。うべも「とし」と名づけ、また「とき」といへりけり。されば「光陰矢の如く、時節流るゝが如し。」といへるも、浮けることにあらず。老にむかへば猶更に年月の早く過ぐること、恰も飛ぶが如し。後を顧みれば、いそぢの齡を過ぎ來しもさのみ久しからずたとひ、いそぢの後またいそぢの齡を經て百年に至るともなほ行先の月日愈早くして、程なく盡きぬこと思ひやられ侍る。　幾程

貝原益軒

貝原益軒名は篤信、福岡藩士、江戸時代前期の儒者、正德四年（一七一四）歿、八十五

年々に年年歳歳花相似、歳歳年年人不同（劉廷之、唐詩選）

今日暮れて勿レ謂今日不レ學而有二來日一、勿レ謂今年不レ學而有二來年一（朱熹、勸學文）

室鳩巣　名は直清、江戸の人、江戸時代前期の儒者、享保十九年（一七三四）歿、年七十七

なき殘れる齡を樂しみて（こそ）過ぐさまほしけれ。愁ひ苦しみて空しく過ぎなんは、いと愚かなりや。年々に花は相似たれど、年々に人は同じからず。老かさなれば、一とせの中にもやうやう衰へ行きて、今の昔に若かず、後の今に若かざることを知りて、かねてより悔なからんことを思ひ、時日を惜しみ、一日も徒に過すべからず。今日暮れて明日もありとて頼むべからず。（樂訓）

一四　進學

諸君の如きは春秋に富み材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども、歳月は待むに足らず、材力は多とするに足らず。孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を渉りなば、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて如何に悔ゆとも、何の益かあるべき。

古詩文選にあるもの

陶淵明　名は潛、晉の詩人（三六五―四二七）

朱文公　名は熹、宋の大儒（一一三〇―一二〇〇）

陶侃　晉の人、陶淵明の曾祖父（二五二―三三四）

即ち今余が身の上なり。かさねしみ苦しまれば、古詩にも、

少壯不レ努力。老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

室鳩巣

盛年不レ重來。一日難レ再晨。及時當レ勉勵。歳月不レ待レ人。

といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。また世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿レ謂今日不レ學而有レ來日。勿レ謂今年不レ學而有レ來年。日月逝矣。歳不レ我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

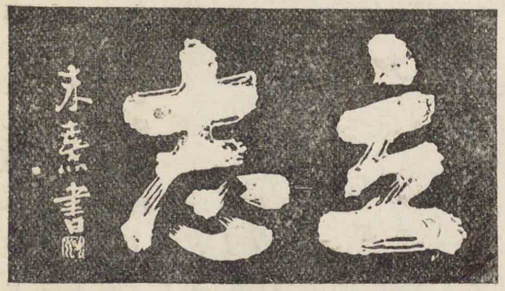
言簡にして意も明白なり。折節打誦して自ら警むるによかるべし。それよりも余が常に愛誦するは陶侃が語なり。

立志

朱熹書

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可逸遊荒醉、生無益於時、死無聞於後、是自棄也。

といへるこそ、學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそ思はる。凡そ人と生れて學に志ありといふきはの生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽果てんは、いと口惜しかるべきことなり。されば、諸君も此の陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。



朱熹筆蹟

たゞし、學は勇進を喜ぶといへども、また急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬこととなれば、急迫にして求むべきに、中に入りて、惑ひ、だ懈を戒めて、常に聖賢の書に優游涵泳しな

紹鷗武野仲村、織田信長の茶道の師、弘治元年（一五五五）歿、年五十三

利休千宗易、豐臣秀吉の茶道の師、天正十九年（一五九一）歿、年七十一

ば、久しうして自ら進益あるべし。余、昔、加賀にありし時、士族の中に紹鷗・利休が風流を慕ひて茶の湯を好む者あり。江戸へ行役する時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、「如何にすけばとて、道中にては止めよかし。」と言へば、其の人いふは、「道中とて一生の外にあらば、これも一生の日數の中なれば、我が茶の湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん。」とて、其の後も止めざりき。學者の道に志すも、此の人の茶の湯を好むが如くなるべし。（駿臺雜話）

自修文

一五　日誌の一節

一　友の溺死

七月十日、第一學期の試驗が濟んだ日だつた。太陽は眩しいほ

江津湖　熊本縣飽託郡にある

訃　死亡のしらせ

どに乾ききつた大地を照りつけてゐた。櫻の木の蔭に集つた級友が、何かしら頻りと相談してゐる中に、K君もゐた。いつもは蓬蓬と延ばしてゐる髪もその日は凉しさうに短く刈つてゐたので、黄色くやけた縁廣の夏帽の下からは、優しい目が覗いてゐた。今日、この間から行きかゝつてゐた江津湖に行かうといふのである。試驗は濟んだ。明日からは休暇である。互に暫く別れる前の半日を、江津に舟を浮べるのは面白いだらう。しかし、心身の疲勞も癒えない今日、ひどく太陽に照りつけられることは一寸躊躇された。K君もあまり氣が進んではゐなかつたが、以前からの約束を果すために行つたのだつた。私は差支があつて行かなかつた。

その夕、私は久しぶりにゆつくり晩餐の卓に着いてゐると、突然O君が來て、K君の訃を傳へた。「何、K君が？　そんなことがあるものか、先刻まであんなに元氣だつたのだから……。」しかし、O君は

提携　互に助けあふ

死者の魂をなぐさめる晨夜通し番をする

通夜に行かうと待つてゐる。それでは、やつぱり本當なのか、やつぱり信じなければならないのか。あゝ、先刻櫻樹の下で別れたのが永久の訣別となつたのか。あゝ、まるで夢のやうだ。たゞ〳〵驚くの外はない。とりあへず箸を投げて、K君の家へ行つた。

その内、夜の帷は垂れて、暗は四方から迫つて來た。八疊の間に、K君が頭からすつぽり蒲團を被つて臥してゐる。呼べば目を開くやうな心持がするのに、呼んでも永遠に歸らないかと思ふと、我知らず涙が流れ落ちる。嗚呼、常なきは人の身の習といひながらも、あまりにあへなく散果てたことよ。私は幼い日からの友達だつた、十數年の間、互に相提携して來たのだつた。それだのに、神ならぬ私は、今日君が江津湖へ行くのを止めることさへ叶はなかつた。せめて同行してゐたら、君の溺死を救ふことが出來たかも知れないのに……。

嚴かな空氣の中に、香の煙は縷のやうに立昇り、彼方此方に啜泣の聲が聞える。いつまでも盡きないものは別離の恨である。まして今宵のやうに再會の期せられない訣別に於ては尙更である。夜も更けた。「それでは君よ。」と暇乞して立出ると、玄關に、主のない黃色くやけた緣廣の夏帽が懸つてゐた。（不破生）

二　京都見物

七月十六日。晴。今日も幸に涼しい。朝の間、大阪で、從兄に天王寺を散々に引廻された私は、正午には獨り京都驛頭の人となり、夕方にはは や七條の親戚の家で旅の衣を寬げてゐた。

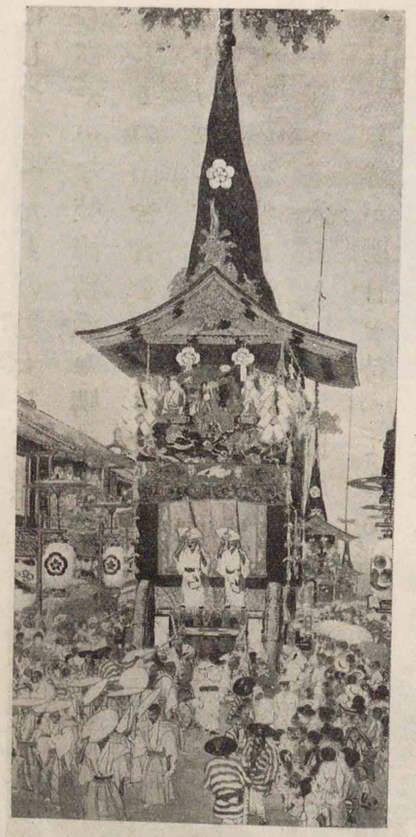
快活な叔父の勸めるまゝに、連日の疲勞を押して、早速四條通に出て見た。

なるほど憧憬の京洛だ。　整然とした大街のほとり、天鵞絨のやうな夜の幕に浮いて輝く無數の燈火は、高く低く、大きく小さく、或はさゞめくやうに、或は永遠の彼方へ架せられた橋の擬寶珠のやうに、疲れきつてゐる私の魂を幻の世界へと誘ふのだつた。殊に思ひがけなくも祇園祭の前夜にお上りをした自分の京都に對する第一印象は、何人のそれよりも、より懷かしく幻想的なものだつたに相違ない。

京洛（みやこ）

祇園祭　七月十七日から同二十四日まで行はれる京都宮幣大社八坂神社の祭禮

鉾（たし）山車の一種



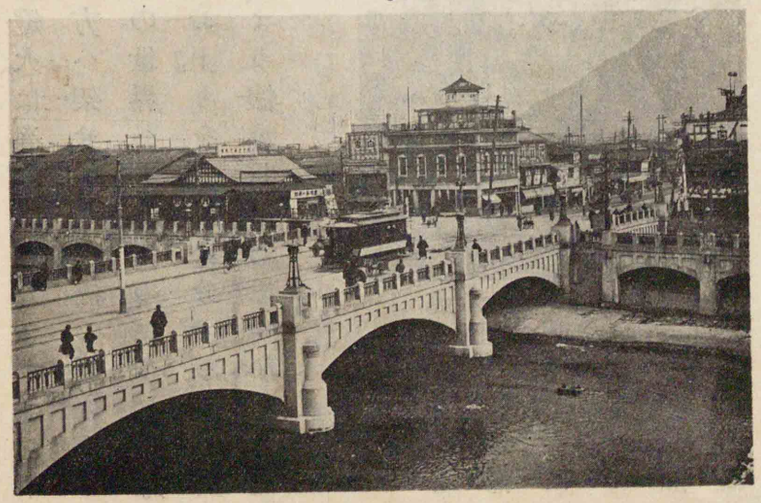
祇園祭（松宮芳年筆）

各町から出る鉾も流石に京都でなくてはと思はせるものだ。魚や鳥や船など

にしつらへたその尨大な車體、きらびやかな裝飾、精緻な構造は、何れもこの田舍者を驚歎させるのに十分だつた。

大勢の群衆に雜つてぞろ〳〵と寺町へ這入ると、案の定、此處でも巨大な鉾が明日を待つてゐる。見れば、車體の上部から民家の二階へ橋を渡して、そこから皆が出入りしてゐる。座席の花飾の中では、二十人ほどの男衆が餘念もなく囃子の稽古をやつてゐる。若いものも老人も皆揃ひの扮

尨大　しまりなく大きい



京都四條大橋

裝だ。笛・太鼓・鐘など、樂器は普通の囃子のと違はないが、その何處となく落着いて古典的な句のある旋律が堪らなく好かつた。

八坂神社

町内の何れ劣らぬ古風な格子つきの家々は、悉く皆見物人のために玄關から座敷まで開放されてゐる。見れば、どの家でも綺麗な毛氈をずつと敷きつめ、蓄音器や茶器を前にした家人達が、暢氣さうに囃子を聽いてゐる。道行く人もまた氣易く、「御免やす。」といひながら縁側に腰をおろして、一服やりながら、鉾の天井の金箔を評價してゐる。凡べてが悠長だ。一體京の人はお祭のために出來てゐるのではあるまいか。

打算的　勘定高い

高廈　高い建物

今朝まで大阪で末梢神經まで極度に尖らせた忙しさうな人ばかり見て來た眼には、此處の人々の動作は凡べてまだるく感じられた。

「京都の人は不生産的だ。」といふ者があるかも知れないけれども、極めて打算的でない彼等は、一面頗る興へる民であることを忘れてはならない。

叔父と私はお仕舞には疲れて了つて、四條大橋の袂の高廈でソーダ水を飲んだ。

上から見おろすと、また一段と夥しい人出に見える。さしもの四條の大通も僅に電車の徐行を許す隙しかない。けれども、その群集は實におとなしいものだ。交通巡査の指揮に從ひながら、左側通行を厲行して、些の澁滞も混亂もなく、緩やかに左右へ流れてゐる。

昌子、
星葉紙
明屋

昌子作
白波の玉のゆくへも眞珠の輪
頸にかくれば涼風ぞ吹く

與謝野寛
舊號は鐵幹、京都市の人、明治六年生、歌人、慶應義塾大學教授
新体詩人

白・卵・青・桃、――浴衣・帽子・髪・帶、美しい靜かな人の波だ。その人の波の下を横切つて、賀茂川が默々と闇の彼方へ流れてゐる、昔ながらの閑寂と幽暗な祕事とを湛へながら流れて行つてゐる。

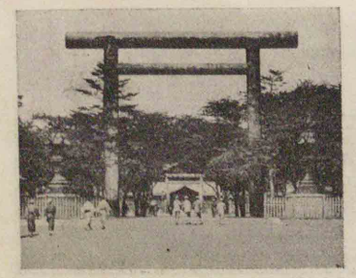
四條大橋を中心にした京人と賀茂川の十字架。

私は圖らずも深刻な無言劇を見ることが出來た。（歳川生）

一六　東京

與謝野寛

我は東京を嫌ふ
而もなほ東京を愛す
我は愛て生りしパリを
捨てて遠く離れまで慕ひ
而もなほ東京を愛す



靖國神社

萬造寺齊
鹿兒島縣の人、明治十九年生、眞宗大谷大學教授

テラス
Terrasse

亡れなる二親を思ふたびに
東京を見ずして死にしを悔みつ
今はたゞ一人残る祝を慰ふ日に
友人狂歌の詩人萬造寺齊を偲ぶ日も
その東京に住まざりしを惜む

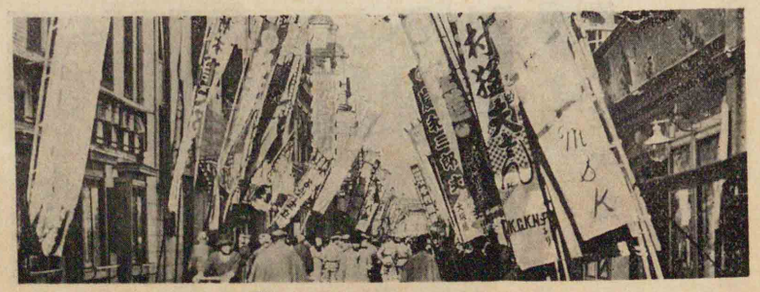
我は東京を嫌ふ
雨降れば泥濘風吹けば砂塵
そゞろぞや淺草の路はちまたはなぎさもなしか
いづこぞや一杯のレモン入り茶に
暮しゆく街を眺むるカフェのテラスは
我は東京を嫌ふ

丸の内

妻
一名は晶子、堺市の人、明治十一年生、歌人

学利雑誌治勅写真ラヂオ
文化建築株式組織寫真廣告
非常に多くの政治政宜主義
表面はアメリカ風の表面模倣
慶なりたち

而もなほ東京を愛す
我の善き師善き友に逢ひ得たるは
その数を尽くしがたし
また諸の善き書に親しみたるは
この都なりたゞ東京なり
また我を備ふ学校あり
我が為の机を素する抽斗あり



淺草

わが忘れなる十餘人のある者を
かつ〳〵ものがたらせつゝ
うの都なりたゞ東京なりし

十七世紀の西鶴は、いきの
都なる上方の都と、誰はかなを二つ
その天才の傲語に勝せ
我は東京を嫌ふ
あゝなほ東京を愛す

西鶴　井原氏、大阪の人、江戸時代前期の小説家・戯作者、元禄六年（一六九三）歿、年五十二

一七　明治から大正へ

徳富健次郎

明治四十五年七月二十一日

日曜だが、起きぬけに二時間の芝刈。

銀　座

天皇陛下御不例の發表があつた。わざ〳〵發表があるぐらゐだから、御重態のほども察しられる。（篤祈あり）

眞黑い雲が今我等の頭上を覆うてゐる。

午後二時過、雷鳴、電光、沛然たる降雨、少し雹が雜つてゐた。

七月二十二日

土用三郎といふのに、昨日の夕立以來、今日も曇つて涼しい。

白桔梗の花が五つ六つ、白つぽけた撫子の花が二つ三つ。芝生の何處かで虫が鳴いてゐる。

寂しい。

見る〳〵小さな雨がほと〳〵と落ちて來る。

寂しい。

夏さびし桔梗の花五つ六つ、

小雨まじりに虫の聲して。

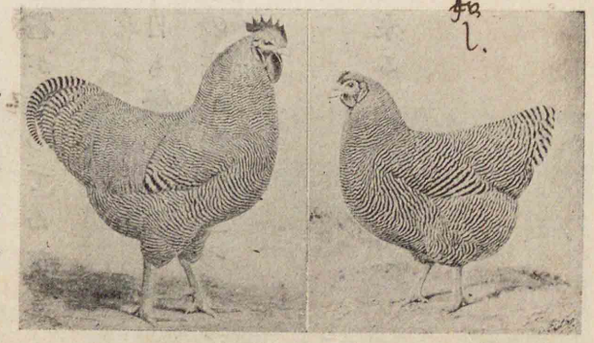
七月三十日

例によつて芝刈。終つて桃の木の下で水蜜桃の立喰。

大きなプリマウスロック（Plymouth Rock）種の雄雞（おんどり）が、雞小屋の外で死んでゐる。羽毛（うもう）が其處此處に散らかつてゐる。昨夜雞小屋の戸を締める時、誤つて雄雞を締出したので、夜中に鼬に襲はれたのだ。隨分死の苦みをしたことであらうのに、家の者はぐつすり寢込んでしまつて、少しも知らなかつた。昨秋以來、鼬の難に罹ることがこれで五たびだ。前回に懲りて雞小屋の締りを嚴重にしたが、外に締出しては仕方がない。

聖天子の崩御を暗示するもの、如し。

梨の木の下に埋葬。



プリマウスロック

午後東京から來た學生の一人が、「天皇陛下今曉零時四十三分崩御あらせられた。」と語つた。

陛下崩御――この悲報に接して、突然闇黑の中に投込まれたやうに感じた。

園内を歩いて陛下の御一生を思うた。

東の方を見ると、空も喪裝をしたかと思はれて、黑色の雲が東京の空を打覆うてゐる。

暮方雨が降出した。

大正元年七月三十一日。

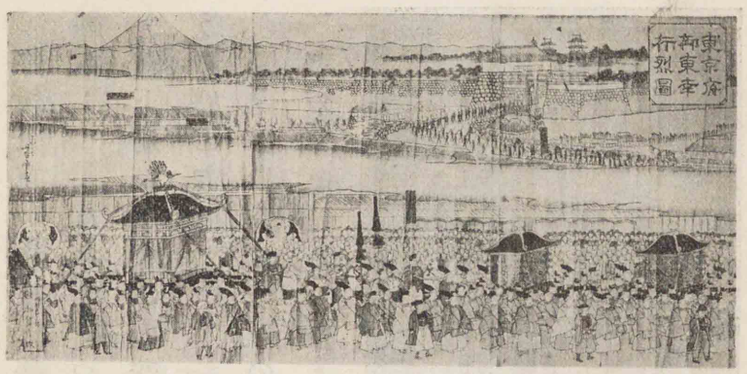
鬱陶しく物悲しい日。

新聞は悉く黑枠だ。ふと新聞の一面に「睦仁」の二

聖天子崩御

明治天皇崩御を報ずる新聞紙

孝明天皇
第百二十一代



車駕東幸（歌川芳虎筆）

字を見つけた。下に「先帝御手跡」とある。孝明天皇の御筆かと思うたのは一瞬時、陛下は已に先帝とならせられたのであつた。新帝陛下の御踐祚があつて、「明治」と云ふ年號は昨日から「大正」と改められるといふことである。

陛下が崩御になれば年號が改められる。それを知らぬではないが、余は明治といふ年號は永久に續くものであるかのやうに感じてゐた。余は明治元年十月の生れである。即ち先帝が御即位式を擧げさせられた年、始めて京都から東京に行幸のあつたその月、東京を西南に

距る三百里、薩摩に近い肥後國葦北郡の水俣といふ村に生れたのだ。余は明治の齡を自分の齡と思ひ馴れ、明治と同年だと誇りもし恥ぢもした。陛下の崩御は明治史の卷を閉ぢた。明治が大正となつて、余は自分の生涯が中斷されたかのやうに感じた。先帝が余の半生を持つて往つておしまひになつたかのやうに感じた。物悲しい日。田圃の向ふで飴屋の吹く笛の一聲が長く響いて腸に沁入るやうだ。

八月一日

月の朔で、八幡樣に神主が來てお神酒が上る。諒闇中の御遠慮で、今日は太鼓も鳴らなかつた。

「今日から五日間お經をたてる。」といふ言ひつぎが來た。先帝の御冥福のためだ。

「雞小屋に大きな青大將が入つて、模型卵を呑んだ。」と、日傭のお内

儀が知らして來た。往つて見ると、五尺もある青大將が喉元を膨らまして、そこらをのたうち廻つてゐる。卵のつもりで燒物の模型卵を呑んで苦しがつてゐるのだ。折から來合してゐた友達が尻尾を摑んで雞小屋から引摺出したので、余は竹竿で叩き殺した。竹で死體をしごいたらぺろりと血だらけの模型卵を吐いた。この頃一向卵が出來ぬと思つたら、この青大將が毎日呑んでゐたのだ。青大將の死骸は芥溜に捨てた。少し經つて見たら、どうしたのか見えなかつた。復活して逃げたのかも知れぬ。

八月二日

紅蜀葵（モミヂアオイ）の花が咲いた。

甲州玉蜀黍をもぎ、煮たり燒いたりして食ふ。世の中にこんなうまいものがあるかと思ふ。これでは田園生活もなか〳〵やめられぬ。

今日は土用中ながら薄寒い日で、朝は寒暖計が六十二三度しか昇らなかつた。盡日北の風が吹いて、時々冷たい細い雨がほとほとと落ちて、見える限りの青葉が白い裏を返して南に靡き、寂しいうらがなしい日であつた。

雞小屋に鼬と見まがふばかりの大鼠がゐた。

八月八日

八月に入つて四五日フランネル（Flannel）を着るやうな日が續いた。小雨が降る。雲がかぶさる。北から冷たい風が吹く。例年九月に鳴く百舌鳥（モズ）が無暗に鳴いた。薄い搔（ハケ）

玉蜀黍（星野空外筆）

人を訪れる時、驚かし聞ゆる。

秋來ぬと藤原敏行の歌、古今集にある

卷一つでは足らず、毛布を出す夜もあつた。

今日は久しぶりに晴れた。空には一片の雲もなゝ、日は晶々として美しく照りながら、寒暖計は八十二三度を越えず、朝から晩まで涼しい南風が水の流れるやうに小止みなく吹いた。瑟々と鳴る庭の松。かさ〳〵と鳴る畑の玉蜀黍。ざわ〳〵と鳴る田川の畔の青萱。見れば、眼に入る綠は皆動いてゐる。庭の桔梗の紫が搖ぎ、雁來紅の葉の紅が戰ぎ、撫子の淡紅が靡き、向日葵の黃が頷き、夏萩の臙脂が亂れ、蟬の聲、虫の音も風につれて震へる。夕日の傾く頃となれば、風はます〳〵涼しく、樹影は黑く芝生に跳つた。

秋來ぬと眼にはさやかに見えねども、
風の音にぞおどろかれぬる。

秋の訪れを知つた

知らされた

現在完了

風の音に驚くばかりか、さやかに眼に見えて立つ秋の姿である。

昨夜は雁の聲が聞えた。

回澤　東京府北多摩郡千歲村の字

今朝向ふの杉の森に「ツク〳〵ウシ、ツク〳〵ウシ」といふ、ほのかな秋蟬の聲を聞いた。

暦を見たら五日が立秋である。

八月十五日

この頃の癖で、起きて出る頃には、いつも滿目の霧雨だなと思ふと、朝飯を食つてしまふ頃から、からりと霽れて、申分のない秋暑になる。

隣の大豆畑に群るカナブンの大軍が大豆の葉を食ひ盡して、今度は自家の畑に侵入した。起きぬけに夫婦して筵を畑に擴げ、枝豆や果樹に群るカナブンをその上に振ひ落した。それを石油の空鑵にあけて見ると、五時から八時過までかゝつて捕つたのが約五升ばかりあつた。でも、まだ十分の一も捕れぬ。

あまり美事な出來だからといつて、回澤から大きな西瓜をたゞ

一個擔いで賣りに來た。綠地に黑縞のある洋種の丸西瓜である。

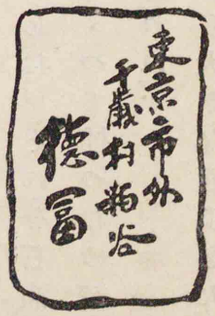
重量が三貫五百目、三十五錢は高くない。井戸に冷して、午後切つて食ふ。味も好かつた。

一月おくれの盆で、墓地が賑かである。細君が鶴子のために母屋の小さな床に茄子馬を飾り、黑い喪章をつけたおもちやの國旗を飾り、酸漿やら、烏瓜やら、小さな栗やら、いろ〳〵供物を並べて、盂蘭盆の遊をさせた。

八月十六日

隣の家鴨が二羽迷ひ込んだ。雌は捕へて渡したが、雄が床の下に深く逃込んで、どうしても捉まらない。隣の息子が雌を連れて來てくわつ〳〵といはしたら、雄はひとりでに床の下から出て來

鶴子　作者の養女



德富健次郎自署

たので、難なく捉まつた。

夕方、縁の籐椅子に腰を掛けて、靜に夕景色を味ふ。刈跡の青い芝生も、庭中の花といふ花も蔭に入り、月下香の香が高く一庭に薫ずる。金の鎌のやうな月が時々雲に入つたり出たりし、南方に淡い銀河が流れる。星もちらほら出てゐる。村々は最早黑う暮れて、時々眩しい火光がぽつと射す。船橋の方には先帝の御爲に上げるのか、哀々とした念佛の聲が長く曳いて聞える。庭ではスイッチョが鳴く、蟋蟀が鳴く、夜といふのに蟬の一種が鳴く。隣の林にはガチャ〳〵が鳴く。

寂しい涼しい初秋の夜。（みゝずのたはこと）

吉村冬彦

船橋　千歳村の字

吉村冬彦（本名は寺田寅彦、高知市の人、明治十一年生、理學博士、東京帝國大學教授）

一八　田園雜感

一

田舍の自然は確に美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るのとはまるきり違つて居る。「さういふ美しさも、馴れると美しさを感じなくなるだらう。」といふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行はさう見透され易いものではない。永く見て居れば居るほど、いくらでも新しい美しさを發見することが出來る筈のものである。若し出來なければ、それは、眼が弱いからであらう。一年や二年で見飽きるやうなものだつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結して了つて居る筈である。六歳になる親類の子供が、去年の暮から東京に來て居る。これに「東京と國とどつちがいゝか。」と聞いて見たら、「お國の方がいゝ。」と答へた。「どうしてか。」と聞くと、「お國の川には『えび』が居るから。」と答へた。此の子供の「えび」と言つたのは、必ずしも動物學上の「えび」のことではない。えびの居る清冽な小川の流、それに翠の影を浸す森や山、河畔

に咲亂れる草の花、さういふやうなもの全體を引つくるめた田舍の自然を象徴する「えび」でなければならない。東京で魚屋から川鰕（エビ）を買つて來て、此の子供にやつて見れば、此のことは容易に證明されるだらう。私自身も此の「えび」のことを考へると田舍が戀しくなる。併し、それは現在の田舍ではなくて、過去の思出の中にある田舍である。「えび」は今でも居るが、「子供の私」はもう其處にはゐないからである。けれども、此の「子供の私」は、今でも「大人の私」の中の何處かに隱れて居る。そして、意外な時に出て來て外界を覗くことがある。例へば、郊外を歩いてゐて、道端の名もない草の花を見る時や、又は遠くの杉の木の梢の神祕的な色彩を見て居る時に、僅かの瞬間だけではあるが、此の「えび」の幻影を認めることが出來る。それが消えた跡に殘るものは、淡い「時の悲み」である。

二

盆踊は此の頃はもはや無くなつたかどうか私は知らない。私が前後に唯一度盆踊を見たのは、今から二十年ほど前に、南海の或漁村でのことだつた。肺結核で其處に轉地して居る或人を見舞に行つて一晩泊つた時が、丁度舊曆の盆だつた。蒸暑い、蚊の多い、そして、何となく魚臭い夕靄の上を眠いやうな月が照らしてゐた。神社の森蔭の廣場に、ほんの五六人の影が踊つてゐた。どういふ人達だつたか、それはもう覺えてゐないが、唯何となく私にはお伽噺にあるやうな淋しい山中の妖精の舞踊を想ひ出させ

盆　踊（圓山應擧畫　山田文學摸寫）

た。そして、何故だか感傷的な氣分を誘はれた。其の時見舞つた病人は、それから間もなく亡くなつた。私は今でも盆踊といふと其の夜を想ひ出すが、不思議な錯覺から、其の時踊つてゐた妖精のやうな人影の中に、死んだ其の人の影が一緒に踊つてゐたやうな氣がして仕方がない。そして思ふ、西洋臭い文明が田舍の隅々まで擴がつて行つても、盆の月夜には、何處かの山蔭のやうな處で、昔からの大和民族の影が昔の踊を踊つて居るのではあるまいかと。盆踊といふ言葉には、田園詩的なそして感覺的な餘韻がある。併し、それはどうしても現代のものではない。其の餘韻の源に遡つて行くと、德川時代などを突拔けて、遠い〳〵古事記などの時代に到着する。盆踊のまだ行はれて居る處があれば、其處には、どこかに奈良朝以前の民族の血が若い人達の體に流れて居るやうな氣がして仕方がない。そして、それが今滅亡に瀕して居るやうな悲

みを感ずる。

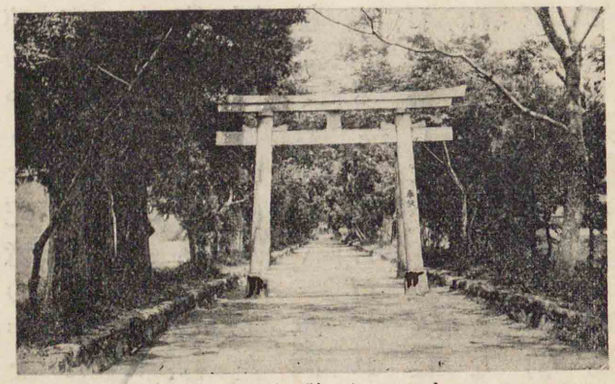
三

夏の盛りに「虫送」といふ行事が行はれる。赤裸の人間が畦道に据ゑられた大きな太鼓や鐘を力に任せて叩く音が、四方の山から反響し、家の戸障子に劇しい衝動を與へる。空には火焔のやうな雲の峯が耀いて居る。朱を注いだやうな裸の皮膚には、汗が水銀のやうに光つて居る。

凡べてがブランギンの油繪を想ひ出させる。耳を聾するやうな音と、眼を眩するやうな光の強さは、其の中に却つて澄透つた靜寂を釀成する。唯それは物の空虛なための靜けさではなくて、物の充實しきつた時の不思議な靜けさである。烈しい音波の衝動のために、害虫が果して振ひ落され、そして、振ひ落された虫がそれきりになるかどうか、確かなことは恐らく誰も知らなかつたらう。

ブランギン
英國の畫家

齊明天皇
第三十七代



木の丸神社鳥居

併し、そんなことはどうでもいゝやうな氣がする。あれは或無名の宗教の莊重な儀式と考へるべきものである。

四

高知市からあまり遠くない朝倉村に、木の丸神社といふのがある。これは齊明天皇を祭つたものだと言はれて居る。天皇の崩御になつた九州の或地方の名が即ち此の村の名になつて居る。どういふ譯で此の南海の片隅の土地が天皇と結び付けられるやうになつたか、それは恐らく誰にも解るまい。それにも係らず、かういふ口碑は人の心を三韓征伐の昔に誘ひ、そして、現代の事相に古い民俗的の背景

を與へる。此の神社の祭禮の儀式は珍しいものだつた。私は子供の時分に一二度見ただけだから、もう大部分は忘れて了つたが、夢のやうな記憶の中を搜すと、こんなことが出て來る。やはり農家の暇な時期を選んだものだらう。儀式は刈株の殘つた冬田の上で行はれた。其處に神輿が渡御になる。それに從ふ村中の家家の代表者はみんな裃を着て、傘ほどの大きな菅笠のやうな物を冠つてゐた。そして、左の手に小さな鉦をさげ、右の手に持つた木槌でそれを叩く。單調な聲、緩やかな拍子で、「ナーンモーンデー」と唱へると、鉦の音がこれを請けて「カーンコ」と響く。どういふ意味だか解らない。或人は「南門殿還幸」を意味すると言つてゐたが、それはあまり當にならない。私は寧ろ意味の解らない方がいゝ氣がしてゐた。神輿の前で相撲がある。併し、それは相撲を取るのではなくて、相撲を取らないのである。美しい廻しを付けた力士

が堂々と睨み合つて、いざ組まうとすると、衞士だか行司だかが飛出して引分け引止める。さういふことが何度となく繰返される。そして、結局相撲は取らないでお仕舞になるのだつた。これはどういふ由緒から起つた行事だか解らないけれども、見る人々の心は、遠い昔に起つた或何か知ら可なり深刻な事件の微かな反響のやうなものを感ずる。其の外、「棒使ひ」といつて、神前で紅白の布を卷いた棒を振廻す儀式もあつたが、詳しいことはもう覺えてゐない。文明の波が潮のやうに片田舍にも押寄せて來て、固有の文化の名殘は大抵流して了つたので、「ナーンモーンデー」の儀式もいつの間にか廢止された。學校へ行つて文明を敎はつて居る村の靑年達には、裃を着けて菅笠を冠つて、無意味なやうな「ナーンモーンデー」を唱へることは堪へ難い屈辱であり、自己を野蠻化する所行のやうに思はれたのだつた。これは無理のないことである。簡

單な言葉と理窟で手早く誰にも解るやうに説明の出來ることばかりが、文明の陳列棚の上に美々しく並べられ、さうでないものは塵塚に捨てられて、其の存在さへ否定された。それと共に、無意味の中に潜む重大な意味の存在は許されないやうになつた。幾千年來傳はつた民族固有の文化の中から常に新しいものを取出して、新しくそれを展開させる人は何處にもなかつた。「改造」といふ叫び聲は、内にあるものの展開ではなくて、木に竹を接ぐやうな意味にだけ持囃された。それで、あの親切な情誼の厚い田舍の人達は、切つても切れぬ祖先の魂と影とを弊履のやうに棄てて了つた。そして、自分とは緣のない遠い異國の歷史と背景が產み出した新思想を輸入して居る。これは、傳來の家や田畑を賣拂つて、株式に手を出すのと同じ行き方である。

新思想の本元西洋へ行つて見ると、却つて日本人の眼に馬鹿馬鹿しく見えるやうな大昔の習俗や行事が、其の儘に行はれて居るのは寧ろ不思議である。これはどちらがいゝか、議論すると解らなくなるにきまつて居る。さうした田舍の塵塚に朽ちかゝつて居る祖先の遺物の中から、新しい生命の種子を拾ひ出すことが、吾吾の當面の仕事ではあるまいかといふ氣もする。（冬彦集）

大谷繞石（おうせき）

大谷繞石、名は正信、松江市の人、明治八年生、英文學者、廣島高等學校教授

一九　夏

一　新　綠

左に折れ又右に曲る崎嶇（きく）たる急坂を登ること十町、「瀧道」と誌した立札のある處から、岐路（わかれ路）を通つて谿へ下りる。路とは名ばかりで、膝（ひざ）を沒するばかりに繁つた熊笹が動もすれば行手を迷はせる。

仰げば、大小の杉や檜が頭上高く枝をさしかはして、日の光を遮つて居る。急に日暮になつたやうな氣がする。

奥へ〳〵と其の小徑を傳つて下りて行く。目ざす瀧に近付きつゝあるのだ。やがて岩に激して白沫を飛ばして居る奔流が眼下に見える。谿底に下り着く。

向側の山は屏風を立て展げたやうな岩山だ。それでも盆栽に見るやうな枝ぶりのいゝ松が、其の岩の破れ目裂け目にしがみついて生えて居る。山躑躅もある。櫨らしい若木、楓らしい若木も見える。川に沿うて尚奥へ進むこと四五十間、とある岩鼻を廻ると、幅三間はあらう、素絹を垂れたやうな瀧が、對岸の絶壁を、勢凄じく轟と音を立て

飛瀑（田中頼璋筆）

て落ちて居る。瀧壺は白波を湧立たせて居る。

瀧の落込む岩壁の左右に、枝の茂つた若葉の楓樹が見える。瀧の風で其の若葉の小枝が戰いで居る。こちらの山の杉や檜のどす黑い綠と對照して、其の楓の若葉の綠が殊に鮮に觀られる。空を仰ぐと、晝の月が淡白く懸つて居る。

二　小雨

風に庭木の葉が戰ぐやうにも聞え、細雨が庭砂に當るやうにも聞える。自分で雨戸を繰つて見ると、やはり細かい雨がしめやかに降つて居るのであつた。簷から點滴を落すまでにはまだなつて居らぬ。夜はあけたばかり。

宿の番傘をさして、竹下駄くわちや〳〵と浴場へ行く。雨に濡れた砂の匂がいゝ。間近の山は木々の姿も判然して居るが、其の裏の山は霧の中に輪郭だけ見え、其の後の峯は頂だけそれかとば

かり朧げに浮いて居る。陳腐な言草だが、全く繪のやうだ。

湯槽の中の先客が「久しぶりの雨だ。」といふ。「一日も二日も降續かねば、畑物は息がつけまい。」といふ。浴衣の裾を裏げて宿へ歸る。湯ほてりの脚にかゝる雨が涼しい。

風が少し出て來た。雨は歇みさうだ。山々の谿間から煙のやうに雲が湧いて、項上目がけて昇る。どの山も其の雲に包まれる。と見て居ると、頓て粒の大きい雨が、今度は稍劇しく降出す。谿の雲が次第に消えて、近い山は又も全身を見せる。朝の膳を持つて來るまで、飽かず雲の徂徠を

山間の溫泉

眺めた。

三　夕立晴

夕暮近く、南の空に雨雲が湧く。ぴかりと光る。程經て、遠くでごうと雷が鳴る。雲は北へ〳〵と擴がる。南は墨を流したやうに黑くなる。眞上の空は、雲の絶間にまだ青空が見える。「一雨來れば宜いが。」と、風呂から出た父が緣で空を仰いで居る。

自分が風呂から出た時分に、果してぱらぱらと降つて來た。風の伴はぬ強からぬ雨だ。それでも軒の樋を溢れがちだ。廊下の壁外に茂る葉蘭と秋海棠とが、其の雫にひたゝ濡れて葉を搖がせる。庭の梅の老樹、蜜柑・椿・松・木蓮など、障子を外して居る母家と裏座敷と兩方からの電燈の光を受けて葉を煌めかす。涼しさうであり、又涼しくもある。

大谷繞石自署

それも小半時、黑雲は通り過ぎて、雨は收まつた。そして、上層の白雲も次第にちぎれ〳〵て、妻も湯から出て、一家が緣側に持出した食膳に揃つた時には、空は全く澄渡つて、恰も十五夜の月が洗はれたやうに、淸く隣家の瓦屋根から二尺も高く昇つて居るのだつた。（北の國より）

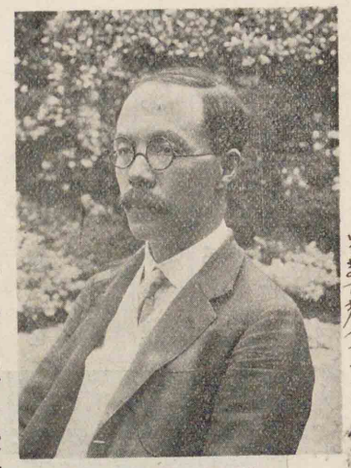
五十嵐力
米澤市の人、明治七年生、文學博士、早稲田大學教授
文章家

二〇　睡蓮

五十嵐力

この春、友達より睡蓮の珍種を貰ひ受けて、徑一尺五寸ばかりなる素燒の鉢に植ゑおき候處、日を追うて發育し、昨今は日毎に一輪乃至三四輪の優しき花を見せ居り候。烈日かん〳〵と照渡りて、なべての草木の打萎れ居り候折に、この花の獨り涼しき笑の眉を開きたるを見候は、そのすが〳〵しさを何にか譬へ候はん。

睡蓮を育つる興味は、最初の一葉の水に浮ぶ時にはじまり候。たゞ一塊の泥土、誰かこの裏に目を新にする百千の花葉を藏することに想ひ及び候べき。春暖の加はるとともに、この泥土に生の蠢きの見え初めて、やがてその間より蝸牛の角の如き數條の芽を生じ候。その芽長ずるに隨ひて、尖頭の部分やゝ太くなり、漸くにしてつぼめる葉の形を水面に現ずるや、忽ちぱらりと開けて、べたりと水上に浮び、盆の如く、海月の如く、朧夜の月影とも見るべく、小さき蛙の圓座とも稱すべく候。かくて、今日一葉、明日二葉、五葉、八葉、圓盤の數日毎に加はりて、



五十嵐力

五十嵐力自署

海中の連珠島の如く見ゆるが中に、やがて一本の花莖長く水面を抽いて、その尖頭に彫刻の如き小蓮花を開き候。　その美しく品位ありて、しかも頼りなげに情あるらしきさまは、あたりに友もやあると顧みるが如く、水面を高く離れたるを危むが如く眩しき日に照らし出されて己が美容を羞づるが如く、而して水上の光澤ある圓き葉は、空中の美花に對して競うて鏡面を捧ぐるに似て、鉢の中の小天地の景致麗しとも面白しとも申すも愚か

東京市日比谷公園の睡蓮

に候。

一たび花を着けたる後は、晴天なる限り、連日二三輪を見せざることなくして、十月の半ばに至り候。　一年の三分の一を領して、しかも常に鮮かなる姿を現すこと、百日紅その他の命長き花の末葉の恥多き類にあらず候。　一花の壽命は二日を常とし、朝八九時の交に開きて、午後の四時前後に閉ぢ候。　閉ぢたる姿は小さき鰻の頭の如く、再び翌日の朝陽を迎へて開き、二日目の夕方に至りて長へに閉ぢ、やがて力なき頭を水中に没し候。　終をよくする、またこの花の一德と申すべきか。

こゝにこの花に附屬して御耳に入るべき一話有之候。　小生初め睡蓮を植うる時、一緒に三つの鉢を求めて、草を植ゑ、石を置き、或は金魚を放ちなど致し候ひしが、他の二つの鉢は五日七日を經れば薄濁りして、水面にどろ〳〵の物を浮べ候に、睡蓮の鉢

のみは、日を經、月を越ゆれども、清明澄徹にして少しも濁ることなく候。小生始め家人等皆々不思議のことに思ひ候ひしが、よくよく取調べ候處、これは贈主の花友達が、嘗てアメリカ（亞米利加）より取寄せたる澄水草の根が、睡蓮の根に附着し來れるがためにて候ひき。この草、細莖・狹葉、外觀の甚だ振はざる小草には候へども、一種特別なる化學的分解の作用ありて、その濁水を澄ます力は世界第一と稱せられ候。もとアメリカのどこやらの陰濕なる地方に在りしものなるが、ふと植物學者の目に止まりて、廣く世界に恩澤を及ぼすに至りし由。我が臺灣に嘗て濁水の滯れる濕地ありて、マラリヤ（Malaria）の流行地として名高かりしが、この水草を

あまの川見えそめぬれば大そらに春來て花の咲く心地する
甲鳥園主人

植うるに及び、全くその病の毒を絶ちたりと申し候。造化は人の惡き施主の如く、一方に病苦を課すれば、必ず一方にこれに應ずる藥を備へて、韜くこれを隱しおき、人智を試みて後にこれを與へ候。世に不用なるものなく、物には必ず二重・三重・五重・百重の意義有之候。歌に、「浦の濱木綿もゝへなす。」と申し候へども、理趣の重疊層累せること、豈に濱木綿に限り候はんや。

浦の濱木綿（熊野の浦の濱木綿もゝへなす心は思へどたゞに逢はぬかも　（万葉集））

自修文

二一　或過失

小酒井不木

平凡の内に過去つた青春時代を振返つて見るに、別にこれと云ふ珍しい思出話もない。が、唯一つ、高等學校時代に、私の注意が足りなかつた爲に、或人の一生の方針を誤らせた事は今になつても氣掛りになつてならない。併し、其の人は今或は立派に世渡りを

小酒井不木（こさかゐふぼく）：愛知縣の人。明治二十三年生。醫學博士。一中の先輩。

杳（くらく）はるかなさま

面責（めんせき）面と向つて責める

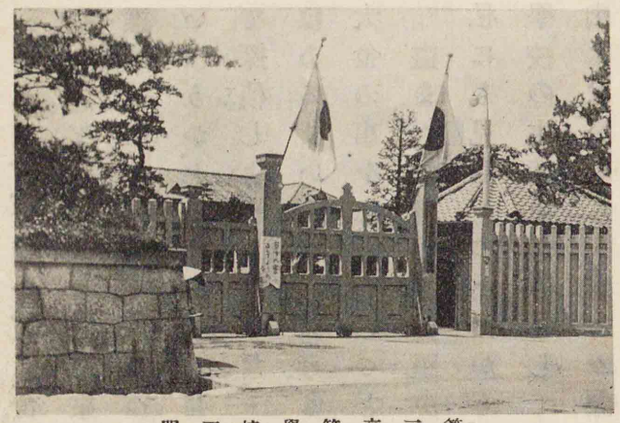
三高　京都にある第三高等學校

して居るかも知れない。何分其の後杳として消息に接せぬから其の生死さへ不明である。若し其の人が死んでゐたら兎に角、生きてゐたら、あの當時の事を書くのは、言はば其の人の古傷から血を流すやうなもので、頗る心苦しいけれども、私自身に取つては、あの當時の心をありのまゝ述べる事が、非常に私の心を輕くするから、茲に書いて見ようと思ふのである。

考へやうによつては、私の執つた態度は當然過ぎる程の當然であるかも知れない。併し、私がもう少し深い注意を拂つたら、あんなに事を大袈裟（おほかさ）にせずに濟んだであらうと、非常に殘念な氣持がする。其の人の友人達は、其の當時竊に私の態度を非難してゐたらしいが、確か學年試驗時分の事であつたので、其の後間もなく暑中休暇となり、隨つて特に面責されるやうな事もなかつた。

其の頃、私は三高の寄宿舍にゐた。私は餘り學費が豐かでなか

つた爲に、參考書などを買ふ事が出來ず、或時二部（今の理科）のSといふ友人から、ワトソンの物理學の原書を借りた。凡そ十日間も借りてゐたと思ふが、いつの間にか其の原書が紛失して居る事を發見した。若しそれが自分の書物であつたら、まあ仕方がないと思つて諦（あきら）めたかも知れない。併し、其の書物は友人Sの所有であつて、若し見付からなかつたら、買つて返さなければならない。而もそれは古本でも三四圓もするから、其の當時の私に取つては大金であつた。そこで、私は直ちに其の書物の行方を捜す事に決心した。



第三高等學校正門

それまで、寄宿舍では、舍生が默つて他人の書物を持つて行き、一二日過ぎてから返しに來るやうな事が時々あつたから、私は或は誰かが默つて借りて行つたのかも知れないとも思つたが、直覺といはうか、どうも盜まれたに違ないと考へられたので、言はば自分で探偵しようと思つた。若しや其の盜み主が自分の知つた男ではあるまいかといふ考も起らないではなかつたが、三四圓といふ大金の事を思ふと、じつとしては居られず、搜索する事に決心した。

盜まれた書物が質屋か古本屋へ行くといふことは、其の當時の私にも見當がついたから、私は先づ古本屋を搜す事にした。高等學校の生徒を相手にして居る古本屋は、京都市内にはそんなに澤山はないから、一軒々々調べても大して骨は折れないだらうと思つた。古本屋は高等學校の附近にも澤山あつたが、盜み主は恐らくそんな近い所では賣るまいと思つて、高等學校から比較的離れた處から搜し始めた。所が、幸運なことには、眞つ先に訪ねた古本屋で、私の尋ねる書物が發見された。私が其の古本屋にはいつて見廻すと、ワトソンの原書の古本が五六册書棚の上に並べてあつた。私は顫へる手で其の一册々々を調べたが、どれも皆似たやうなもので、私も友人の書物のこととて明瞭に記憶せず、友人も別に認印を押したり名前を書いたりして置かなかつたので、確かな鑑別を行ふ事が出來なかつた。でも、どうやらそれらしい書物が見付かつたので、早速友人Sを連れ、一緒に古本屋へ行つて其の書物を見せると、流石にSは一目でそれが自分のである事を斷言した。

そこで、私は古本屋の主人に此の書物を誰から買取つたかを訊ねようと思つたが、若し私達がなまじ口を利かうものなら、隱されてしまふかも知れないと思ひ、尙又、賣主が自分の本名を告げる譯もあるまいと思つたので、其の場は何喰はぬ顏をして、友人Sにそ

推理又は經驗によらず直接に知得識別すること

れとなく其の書物を見張つてゐて貰ふやうに賴み、學校に歸つて、一伍一什を生徒監のH先生に話した。

H先生は事情を聞いて、「それは捨てては置けない。僕も一緒に行つてやるから、これからすぐK警察署へ訴へよう。」と言つて、どし〳〵先頭に立つて歩き出した。聽て私達は友人Sに逢ひ、三人で警察に行き、係の刑事に事の顚末を話した。すると、刑事は私に向つて、「若しや、あなたの友人の中に犯人があるやうだつたら、お困りではないでせうか。」と訊ねた。其の時、H先生は、私の返答を待たず、「たとひ犯人が誰であつても、學校の爲に徹底的に調べて欲しい。」と斷言した。そこ

小酒井不木

顚末　始から終までの事情

で、刑事は私達を待たせて置いて、半町と隔たつて居らない古本屋へ行き、問題の原書を取返して來てくれた。

若し犯人が僞名を使つてゐたなら、或は知れずに濟んだかも知れない。併し、犯人は自分の本名を告げて書物を賣つたのであつた。私は其の犯人が私の能く知つてゐる生徒であることを知つて、非常に驚いた。併し、最早どうする事も出來なかつた。さうして、其の生徒は學校を退學させられるの餘儀なきに至つた。後で分つた事だが、其の生徒は、私の書物ばかりでなく、他の舍生の書物をも盜んで、他の古本屋に賣つたさうであつて、其等の書物もそれぞれ其の所有主に戻り、唯古本屋だけがとんだ迷惑を蒙る事になつた。

其の生徒は確か一人息子で、お父さんは教育家であつたさうである。當人は退學させられただけで、學校當局の骨折によつて、別

迂濶（うつかり）

に法律の制裁は受けなかつたと思ふが、お父さんは自分の勤めてゐた學校を辭職して、謹愼されたと云ふ事であつた。私はそれを聞いて非常に悲しかつたが、如何ともする事が出來なかつた。若し私が今少し注意深く考へたら、犯人は自分の知つて居る生徒であるかも知れないから、迂濶（うくわつ）には行動することが出來ないと思ひ付いたかも知れない。或は又、古本屋の主人に事情を話して、事を穩便（オンビン）に取計らふ事が出來たかも知れない。併し、私は持前の探偵癖（ヘキ）によつて、一本調子に進んで了ひ、到頭取返しの付かない事を仕出來（でか）したのである。

無論其の生徒も一時の出來心で行つた事であるから、そんな悲慘な結果にならうとは夢にも思はなかつたであらう。それを警察沙汰にしたのは、今から考へて見れば誠に無理解な話である。況（や）

小酒井不木

小酒井不木自署

してそれによつて其の生徒の一生の方針を誤らせ、其のお父さんを悲境に陷れたのだから、無理解どころか實に罪な話である。かう考へて見ると、言はば私の若氣の至りでやつた事が愈後悔されてならないのである。

思へば、それはもう十七年も昔の話である。其の後、其の人はどうしたか、私は少しも知らない。が、私はいつも此の事が氣にかゝつて居る。さうして、私は此の事を私の所謂「青春時代の過」の大きなものの一つとして數へて居るのである。願はくは其の人に幸あれ。

二　近代の和歌

○

いづくにか父の聲きこゆこの古き

若山牧水

名は繁、宮崎縣の人、明治十八年生、歌人

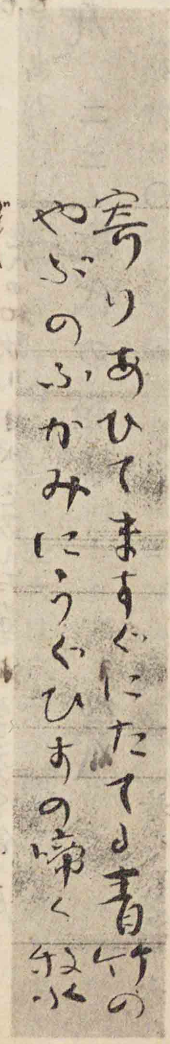
昔の和歌＝不自然なる作つた歌
近代の和歌＝自然を表した藝術ある文字の飾を廢す

自然なる
餘韻ある
近代の和歌
若山牧水
歌人似たる人
北原白秋

寄りあひてますぐにたてる青竹のやぶのふかみにうぐひすの啼く　牧水

島木赤彦　本名は久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一

大きなる家の秋のゆふべに。



牧水筆蹟

門ごとに橙うれて海人が家の
背戸にましろき冬の浪かな。

秋霧の茄子のはたけに人居りき、
やがて車を曳きて去りにけり。

○

椿の陰をんな音なく來りけり、
白き蒲團を乾しにけるかも。

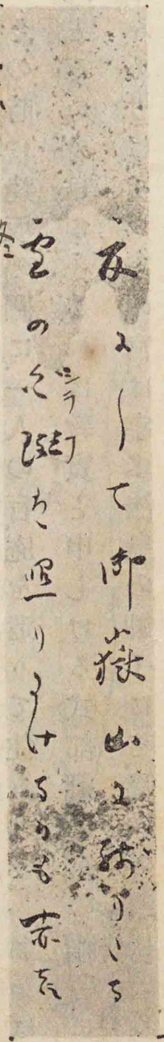
長雨のあがりとなりぬ青桑原、
風吹きて桑の動きゐる見ゆ。

島木赤彦

夏にして御嶽山に殘りたる雪の白斑は照りにけるかも　赤彦

石川啄木　名は一、岩手縣の人、歌人、明治四十五年歿、年二十七

新しき明日の來るを信ずといふ自分の言葉に嘘はなけれど――



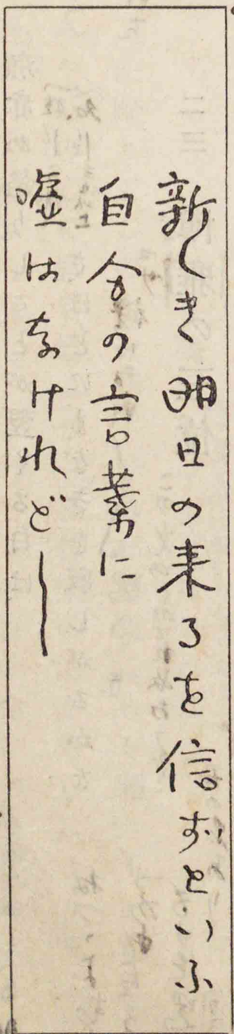
赤彦筆蹟

短日の障子明るし時をおきて
裏山の風冬木を鳴らす。

○

汚れたる足袋はく時の氣味惡き
思に似たる思出もあり。

石川啄木



啄木筆蹟

雨降れば我が家の人たれも〳〵、

源博雅　平安朝時代中期の人、天元三年（二五〇）歿、年六十二
延喜　第六十代醍醐天皇
村上　第六十二代の天皇
逢坂の關　近江國、山城國の境
宇多法皇　第五十九代の天皇

沈める顔す雨晴れよかし。
顔赤め怒りしことが翌くる日は、
さほどにもなきを寂しがるかな。

二三　博雅の三位

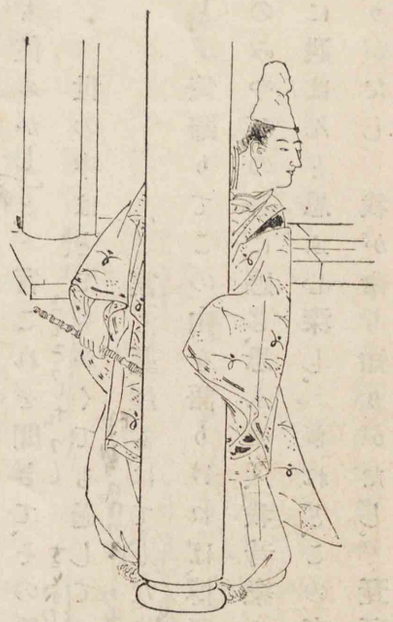
今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。よろづのことに勝れてありける中にも管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈きけり、笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に、四位の殿上人にてありけり。

その時に、逢坂の關に、一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に彈く。然る間、この博雅この道を强ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば、行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやう、「など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答をばせずして、曰く、

世の中はとてもかくても過してん
宮も藁屋もはてしなければ。

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いよ〳〵そのみやびの心に感じ、思ふやう、「我音樂の道を好むによりて、この盲に遇はんと思ふ心深し。されど、この盲の命いつまであらんも計りがたし。我が命も知りがたし。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。

世の中は世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ（蟬丸、新古今集）



源博雅（菊池容齋筆）

これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが彈くを聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども、蟬丸その曲を彈くことなかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や彈くぞと密に立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少し打吹きたりけるに、博雅「あはれ、今宵は興あり。逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は彈くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶を搔鳴らして、物哀れに思へる氣色なり。博雅これを

逢坂の關の嵐の烈しきにしの　ひてぞぬたるる世を過ぎんとて（蟬丸、續古今集）

極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに、
しひてぞぬたる世をすごすとて。

とて、琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して哀れと思ふこと限りなし。盲獨言に曰く、「あはれ、興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし、物語せん。」といふを、博雅聞きて、聲を出して、「王城にある博雅といふものこそ此に來たれ。」といひければ、盲の曰く、「か

逢坂山の蟬丸（篠澤秀彥筆）

く申すは誰にかおはする。」と。博雅の曰く、「我はしがゝの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸にこよひ汝に會ふ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉・啄木の手を聽かん。」といふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すゞ〳〵喜びて曉に歸りにけり。

これを思ふに、もろ〳〵の道はたゞかくのごとく好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば、末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸賤しきものなりといへども、年頃宮の彈き給へる琵琶を聽きてきはめたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始まれるなりとなん語り傳へたるとや。（今昔物語に據る）

二四　鬼作左

新井白石

本多作左衛門重次は徳川家譜代相傳の御家人なり。生年七歳にて贈大納言殿に仕へ參らせしより、徳川殿の御時に至つて、度々の高名數を知らず。永祿八年三河國盡く御手に屬しければ、始めて奉行職を置かれ、本多重次・高力清長・天野康景三人に仰せて、その職を掌らしめらる。この時、三河國にて、歌に、「佛高力・鬼作左、どちへんなしの天野三郎兵衛。」と謠ふ。重次は恐しげなる男の、己がいひたきことをばありのまゝに打言ひ、いかにも思慮ある人とも見えず。かゝる職務に堪ふべきものにあらずと見えしに、心正しく直く、しかも民を使ふに慮あり、訟を聽分つこと明かなりしかば、人皆德川殿の御計らひを感じ參らせしとなり。

天正十二年、小牧の役あり。やがて秀吉・信雄仲直りし給ひ、信雄について於義丸殿を養君とし給ふ時、重次が子仙千代丸も、石川伯

新井白石　名は君美、江戸時代前期の儒者、享保十年（一七二五）歿、年六十九

本多重次　三河國の人

贈大納言　徳川廣忠三男。没後、徳川殿家康永祿正親町天皇の年號（一三五八―一三六〇）

高力・天野　ともに三河國の人　天正正親町・後陽成兩天皇の年號（一五七三―一五九一）

小牧　尾張國

信雄　織田信長の次子

於義丸　越前少將秀康の幼名

石川數正　徳川家の世臣

者守數正が子と同じく附けて參らす。抑、この於義丸殿と申すは徳川殿の御二男、故ありて生れ落ちさせ給ひしより、重次とりて養ひ參らす。今年御歳十一になり給ふが、都に上らせ給ふことを御殘惜しく思ひしかば、我が獨子にて愛しける仙千代丸附けて參らせたり。

本多重次

秀吉も上には於義丸殿を養ひ參らすとは披露あれど、内々は人質とし、徳川殿に親しくならん謀なりければ、「本多は殊に彼の譜代のおとなり。その子を參らせしことこそ嬉しけれ。」と、悦び給ふこと斜ならず。

さるほどに、秀吉正二位内大臣に歴上り、關白の職になつて、於義丸殿にも元服させ、秀康と名のらせ、從四位下左少將兼三河守に任じ、信雄卿を媒とし、徳川殿御上洛のことを勸め給ふこと度々に及べども、上り給ふべしとも聞えず。よつて三河守殿も失はれさせ給ふべしなど風聞す。三河守殿の御母このことを聞き給ひ、「守殿失はれ給ひて後、一日も世に長らふべしとも覺えず。死なば一所にこそ死なめ。」とて、忍びて大阪に上らせ給ふ。死なば一所

重次「いやく、仙千代丸都におきて人の疑受けんことも詮なし。たゞ一人ある子失はれんも不便なり。」と思ひければ、母がいたはり以ての外に候。暫しの暇を賜はりて、この世の暇乞をも仕らせばや。」と、守殿へ申して呼び迎へぬ。幾程なく、石川伯耆守數正は徳川殿に背きて秀吉の御方に參る。さてこそ重次が二心なきところ顯れて、まことに思慮深くは見えけれ。

かくて關白殿の仰にて、「仙千代丸疾く參らすべし。」と、守殿よりの御使度々に及ぶ。重次もせんかたなく、「これもいたはるところのものなれば、『今更參らすべ候。且は母が病も年頃この子戀ひ慕ひし故なれば、

岡崎　東海道五十三次の一、本多氏五万石の城下

本多正信　小字は彌八郎

妹　朝日姫、後に南明院といふ

しとも覺えず。』と伏沈み歎きぬ。されば息男が身代りに、このものを參らす。」とて、甥の源四郎富正を參らす。關白殿「安からぬことなり。本多奴に誑られたりけり。」と、怒り給ふこと大方ならず。かゝりし程に、また東西の軍起りなんと聞えて、宗徒の御家人の中、岡崎の城守るべきものを選ばる。本多佐渡守正信承りて、「この城を枕として討死仕るべきものに仰付けらるべし。」と申しければ、やがて重次召して、岡崎の城を賜はり、數百騎の兵を屬けらる。この時重次が御暇乞申しし氣色、生きて再び見參すべしとも見えざれば、その志を感ぜさせ給ひて、息男成重本領安堵の御書をなし下さる。その御書に、「天正十三年十二月八日」と記され、「本多丹下殿へ。」となされきとなり。

關白殿いかにもして徳川殿と親しうならんと、色々に謀をめぐらし、やがてまたその妹君を徳川殿の北の方に參らせられしかば、

大廳　秀吉の母　井伊　名は直政　大久保　名は忠世

徳川殿この上は見參なくては叶ふまじとて、御上洛あるべきにきまる。「御家人等が危く思はん所も侍る故、都に御逗留あらん程は、それに留めさせ給ふべし。」とて、大廳を下し給ひしかば、岡崎の城に入れ參らせ、重次これを守る。井伊・大久保も同じく御後に留る。

大廳

この時、重次下知して、大廳のおはしますほとりに薪を積むこと山の如し。こはそもいかなることぞと驚き、大廳の御供せし女房達、はしたなして、薪積む下部男一人招き、酒など飲ませ、心よくとりて、「さて、何事にか、このほど日々にかく薪を積むことぞ。」と問へば「いかなることとも下郎はいかで知り申さん。たゞし、承るところは、『關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、もしくは留め參らせて返し給はずば、今

度都より御下りありてこれにまします御方を盡く燒殺し申さん料の薪。』とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より伐りて候が、この本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遲じ遲しと待ちかねて、けふ火を附けう、晩に燒きたてうとせられ候を、井伊殿や大久保殿が『暫し、暫し。』と制し給へばこそ、今まではかくて候へ。『いたはしや、美しき都上臈の、今の内にも灰土にならせ給はんことの無慙さよ。』と、下郎等は申すことにて候。」といひしを、女房達にかくといへば、「あな悲しや。その本多といふ男が日々に參りて、恐しげなるこわねにて、『家康よりこゝに附け參らせて候。御用のことあらば承りなんず。』といふを、今思ひ合すれば、三河殿の始めて御參りありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、『あれは家康が内にて三奉行とかいふ中の鬼作左衞門といふものの子ぞ。』と仰ありしかば、『恐しゝ。鬼も子を生むにや。鬼の子はいかなるものにや。』とて、物越しに人々の見たりしに、その親の鬼ならばさこそあらめ。されば、これへ參る度毎に、『家康歸り候はんとのことは、未だ御沙汰も聞え候はずや。』と、をとゝひもいひしぞ、今朝も昨日もいひしぞ、待遠にや思ふらん。あはれ、家康疾くして返させ給へかし。」と、泣き口説きてこの由を大廳へ申しければ、大いに驚き歎き給ひて、日々の御消息ありて、「德川殿を疾く返させ給へ。こなたの有樣のいぶせさ、いつの世にかは忘るべき。」

新井白石

など、ありしことどもこまゝと仰せ遣はされしほどに、程なく御歸國ましまし、大廳歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、情なくも御母上を下し給ひしものかな。鬼本多とかやが、とこそ言うたれ、かくこそ計らうて候ひつれ。今は

相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、文學者

一茶　小林氏、通稱は彌太郎、信濃國の人、江戸時代後期の俳人、文政十年（一八二七）歿、年六十五

朝日の姫君を參らせ給へば、德川殿の御爲にも大廳は御母上にて候を、いかに鬼なればとて、己が主のことと知らぬことや候べき。それにかく辛き目を見せ參らせて侍ればはや〳〵德川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大廳の御恨をも晴らさせ給へ。」と、とりどりに訴へければ、關白殿笑ひて、「家康はよきものども數多召使ひけり。秀吉もその如き家人をば欲しきことに候ぞや。」とばかり宣ひて、御座を立たせ給ひきとなり。（藩翰譜）

二五　一茶雜感

相馬御風

一茶の文章の中にこんなのがある。

「布施東海寺に詣でけるに、雞どもの跡慕ひぬることの不憫さに、門前の家に寄りて米一合ばかり買ひて、菫・蒲公英のほとりに散らしけるを、頓て仲間喧嘩を幾ところにも始めたり。その内、

梢より鳩・雀ばら〳〵飛來りて、心靜に食らひつゝ、雞の來る時小早く元の梢へ逃去りぬ。鳩・雀は蹴合の長かれかしとや思ふらん。士農工商その外さま〴〵のなりはひ皆かくの通り。

米蒔くも罪ぞよ雞が蹴合ふぞよ。」

微笑を禁じ得ない好文章である。書かれてゐる事柄にも無論面白味があるけれども、私は、それよりも、さうした光景を眺めてゐる一茶その人の態度に、より多くの興味を覺える。初は自分の跡を慕うて寄つて來た雞

小林一茶筆讀

を不憫に思ふあまり、米を買つて蒔與へて置きながら、その米がもとで雞が仲間喧嘩を始めたのを面白がつて傍觀したり、鳩や雀が隙を狙つて雞に與へられた米を心靜に食つてゐるのを追ひもせずに眺め樂しんだりしてゐた、その一茶の心持が寧ろ面白く感じられるのである。「喧嘩はよせ、なぜ仲よく皆で食はないのだ。」といつた調子で、その場合、雞に喧嘩をやめさせようと騒ぎ廻つたり、「おい、それは雞にやつた米だぞ、貴樣達はあつちへ行つて居れ。」といつた風に、その場合、鳩や雀を追ひまくつたりせずに、たゞもう何といふことなしに、その場の光景に眺め入つてゐた所

小林一茶

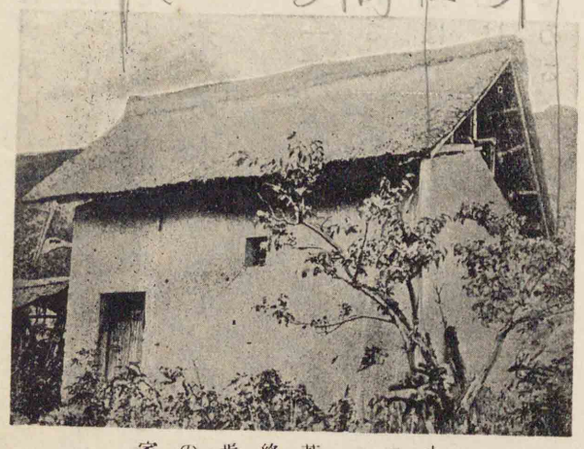
享和光格天皇の年號（一八〇一―一八〇四）

にいかにも一茶の一茶らしいところがある。そして、何もかも見終へてから、「士農工商その外さま〳〵のなりはひ皆かくの通り。」などと、毒のない捨臺詞を殘して、もぞ〳〵とその場を立去つて行く一茶その人の姿までが、私には面白く想像される。

一茶全集を取出して讀む毎に、いつも一種の驚きを感じさせられるのは、「父終焉の記」の一篇である。あの人にしてこの文章がと思はれるほどに、その一篇はしみ〴〵としたものである。その日記は、享和元年四月二十三日に始まつて、同年五月二十八日に終つてゐる。五月十日の條にこんなことが書いてある。

「頻りにありのみをたべたしとむづかりたまへば、この邊のゆかりあるもなきも、親しき限り富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね搜しつくすといへども、ありのみ一つ貯へたる人な

く、夏さへ淋しき山里なりき。けふは分けて宣ふなれば、善光寺へ行かまほしく、曉に支度して門を出でけるに、皐月の空もほのぼの晴れて、白雪はた山にあるからに、青葉がくれの花は春を殘して、種蒔の山人など懷かしく、時鳥の三聲一聲もこよなく時めく空なるに、なじかは心晴れぬ曙なりけり。」



小休　一茶終焉の家

彼はこんな風にしてはる〳〵七里の坂道を辿り、病父の求める梨の實一つが欲しさに、やるせない思を抱いて、善光寺の町まで出掛けたのであるが、遂にそこでも片割れ一つ得ることが出來なかつた。

雪中に云々　臭の孟宗を指す
氷上に云々　晉の王祥を指す

吉田　長野の東

「昔、雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、我梨一つ得る能はざるは、皇天我を捨てたまふかや、佛神我を見限りたまふかや。一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ待ちゐたまはん。このまゝに歸りて、父を何と慰めんやと思へば、胸塞がりて、忍び落つる泪は大道を潤し、往き來の人の狂者と笑はんも恥かしく、暫く手を組み首をうなだれて心を沈めけり。この地になき物いづ地にかあらん。たゞ一足も早く戻りて、藥進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來れるに、木立の山鴉三つ四つ我を見ては聲を立つるに、何となく父の身の上の心に掛り息もつきあへず足を早めしほどに、日影は八つ時といふ頃宿に戻れり。」

その時一茶は既に三十九歳であつた。三十九歳の一茶が、このやうにして病父の欲しがる梨一つのために、七里の坂道を泣くやう

な思で一日の中に往復したりしたことを思ふと、全く涙ぐましくなる。

私は汽車に乘つてあのあたりを通る時に、そこ〻の山路を眺めながら、よくこの一茶の梨買の話を思ひ出すのである。

洒脫は決して一茶の全面目ではなかつた。「兎も角もあなたまかせの年の暮」と投出すまでの一茶の惱みは、かうした愚で純な情の人だけの經驗する尊い惱みに外ならない。いづれにしても、一茶といふ人を知る上には、この「父終焉の記」の一篇は最も貴重な文献の一つである。（一茶と良寛と芭蕉）

二六　女流の俳句

○

鼻紙の間にしぼむ菫かな。

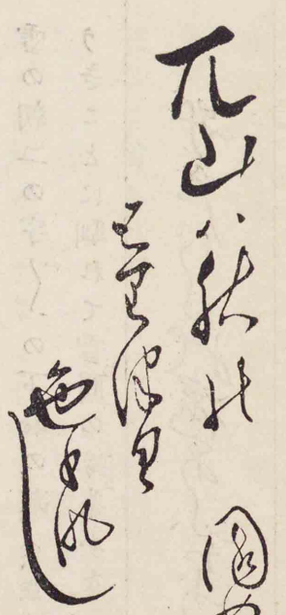
園女

園女　岡西惟中の妻、伊勢國の人、享保十一年（一七二六）歿、年六十三（或は七十四ともいふ）

芭蕉ほめて曰く白菊や目に立てゝ見る塵もなし

芭蕉の門人にして大いに愛さる

兀山は秋のとりつく色もなし　園女



園女筆蹟

衣がへみづから織らぬ罪ふかし。

負うた子に髮なぶらるゝ暑さかな。

○

鶯に手元やすめん流しもと。

朝顏の咲くや親にも叱られず。

○

雲の間の星見てゐるや杜鵑。

井戸端の櫻あぶなし酒の醉。（十三歳の時の句）

智月　近江國の人、芭蕉の門人

秋色　大目氏、名は秋、江戸の人、其角の門人、享保十年歿、年五十七

あき入にどんとめいたり小鳥ども　ち月

捨女　田氏、丹波國の人、元祿十一年（一六九八）歿、年六十五

井戸ばたの櫻あぶなし酒の醉　秋色

智月筆蹟

雉の尾のやさしうさはる菫かな。

涼しさや日の落ちかゝる海の上。

○

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡。（六歳の時の句）

うきことに馴れて雪間の蕨菜かな。

秋色筆蹟

○

捨女

羽紅　凡兆の妻

千代女　加賀國の人、安永四年（一七七五）歿、年七十四

百なりやつる一筋の心より　ちよ

霜燒の手を拭いてやる雪まろげ。

縫物や着もせでよごす五月雨。

○

鶯やまたいひなほしいひなほし。

根をつけしをなごの慾や菫草。

蝶々や何を夢みて羽づかひ。

けふばかり男をつかふ田植かな。

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水。

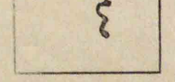
ほとゝぎす〳〵とて明けにけり。

○

羽紅

○

千代女



千代女筆蹟

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら。
破る子のなくて障子の寒さかな。

○

行くも來るも皆春風の堤かな。
橋詰に小店のかゝる新樹かな。
根に雪のはきためてある椿かな。
生きすぎて我も寒いぞ冬の蠅。

○

かんざしよ櫛よさて世は暑いこと。
子を寝せた間をぬけ出でて涼みかな。

多代女　市原氏、陸奥國の人、慶應元年（一八六五）歿、年九十三

花讃　古川氏、名はまつ、文政十三年（一八三〇）歿、年二十三

多代女

花讃

自修文

二七　山岡鐵舟

一

徳川慶喜が寛永寺に引籠つて、ひたすら謹慎の意を表して居るのにも拘らず、血氣に逸る旗下の侍は、如何にもして慶喜を動かし、薩長軍と雌雄を決しようとする勢であつたので、容易に鎮めることが出來なかつた。

そこで、海舟は此等過激な徒を鎮めるために、高橋泥舟に託し、遊撃・精鋭の二隊を率ゐて慶喜の身邊を守らせた。泥舟は由來槍術の達人で、槍一本で伊勢守にまで昇進した人である。

泥舟が力の限り慶喜の身邊を護つて居るのにも拘らず、旗下の人心は益〻動搖し、かつて加へて、官軍の先鋒が既に靜岡に着して居るといふ時になつたから、若しこれを放つておけば、幕臣中にはどこまでも一戰を試みるといふ者もあつて、江戸八百八街は忽ち修羅の巷と變ずるかも測られぬといふ危機一髪の時になつて來た。

徳川慶喜　徳川第十五代將軍、公爵、大正二年歿、年七十七

寛永寺　東叡山といふ、東京上野にある、天台宗、徳川氏の菩提寺

海舟　勝安芳、安房守といふ、幕末の功臣、伯爵、明治三十二年歿、年七十七

高橋泥舟　通稱は精一、舊幕臣、明治三十六年歿、年六十九、海舟・泥舟と共に三舟と稱せられた

危機一髪　將に危險の及ばうとする瞬間

恭順（つゝしんで命に従ふこと）

慶喜は深くこれを憂ひ、一日泥舟に向つて、

「お前は靜岡に往つて、私の恭順謹慎して居る次第を詳しく述べて、江戸城を攻撃しないやうに願ひ、然るべく取計らつてくれぬか。」

と命令した。泥舟は謹んでその命を奉じた。慶喜は一旦命令はしたものの、更に言葉を改めて、

「併し泥舟、お前が此處を立退くと、無謀の旗下が一時に騒ぎ出して、どのやうな大事を惹き起すかも測られぬ。今日まではお前の骨折で鎮まつて居るのぢやから、お前が行つてしまふと、能くこれを鎮めてくれる者がない。誰かお前に代つて往く者はあるまいか。」

高橋泥舟

山岡鐵太郎名は高歩、號は鐵舟、舊幕臣、子爵、明治二十一年歿、年五十三　烏滸（おろか）

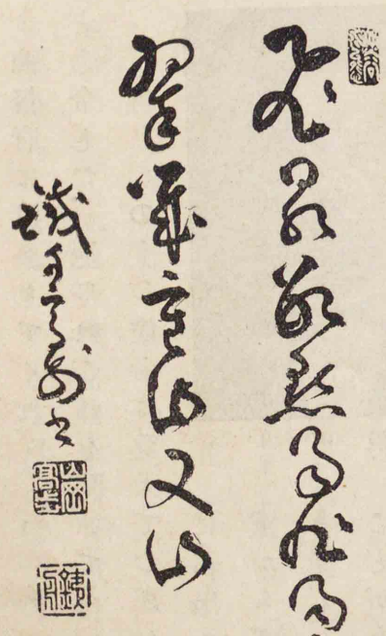
飛泉若ノ默雨（スルガ）
非ヲ雨ニ空翠幾
重山又山
鐵舟高歩書

と、悲痛の色を現して物語つた。すると、泥舟は畏つて、

「子を見ることは親に如かずと申しまする。我が子ではござらねども、旗下幾万の中で、この度の使命を全うする者は、義弟の山岡鐵太郎の外には先づないと存じまする。愚弟を推擧いたしますることは烏滸の沙汰ではござりまするが、この場合、上様には鐵太郎にお命じ下されては如何でござりまする。」

といふと、慶喜は暫く考へ、

「お前が鐵太郎を適任と思ふなら、私には少しも異存がないから、早く鐵太郎を大



山岡鐵舟筆蹟

總督府に遣はしてくれ。」

と命令した。泥舟はこれを聞いて、

「併し、この度の使命は重大でござりまするから、鐵太郎を御前に召出されて御命令遊ばせ。『君命重からざれば、臣、事を輕んず。』と申しまする。若し誤つて使命を辱めることがありましては、後悔いたしましても及びませぬ。」

と答へたので、直ちに慶喜から使を遣はして鐵太郎を呼出すこととなつた。

山岡鐵舟

二

使に接した鐵太郎の鐵舟は、如何なる御用向かと打案じながら、急いで寛永寺に往くと、直ちに「將軍の御前に通れ。」との指圖である。

慇懃（ていねい）

言はれるまゝに伺候（しこう）すれば、面貌の窶（やつ）れ果てた前將軍の側には、義兄の高橋泥舟が淋しく控へて居る。時勢の推移とはいひながら、これが昨日まで六十餘州の兵馬の權を握り、三百の侯伯を指揮してゐた將軍の末路かと思へば、さすがの鐵舟も感慨無量、默して仰ぎ見ることが出來なかつた。

暫くしてから、慶喜は極めて慇懃（いんぎん）に、

「今日お前を呼出したのは餘の儀でもない。目下靜岡に滯在して居る官軍の大總督府に伺候して、この慶喜が謹愼して天下の泰平を祈つて居ることを言上し、穩便（おんびん）の處置を取つて、この身は如何やうになつても苦しくないから、江戸に騷の起らぬやうにして貰ひたいのぢや。」

といつた。これは鐵舟に取つては死よりも重い命令なので、流石に心身共に碎けるやうな思を感じたが、聊かも色には現さず、徐（おもむ）ろ

切羽詰る　さしつまつて仕方がなくなる

不覺　思はず知らず

たくまれる　はかられる

に慶喜に向つて、

「上樣には、切羽詰つた今日、どこまでも御恭順遊ばす御精神でござりまするか。」

と尋ねると、

「いかにも朝廷に對して二心は持たぬ、何處までも恭順する所存ぢや。しかし、既に朝命の下つた上は、所詮我が命はあるまい。かうまで人々に憎まれて、恭順の目的が達しられぬかと思ふと、返す〳〵も殘念な次第ぢや。」

と思はず不覺の涙を落した。鐵舟は仰ぎ見て、

「上樣には何をつまらぬことを仰せられます。憚りながら、眞實御謹慎の思召ではなく、詐つてかう仰せられるものとお見受け申しまする。他人にたくまれ給うたのではござりませぬか。」

と顏を犯して念を押すと、慶喜は斷じて二心がなく、何處までも朝

不肖　おろか

膽略　大膽で智略のあること

命には背かぬといふ決心を物語つた。

鐵舟はその決心の程を確めて、やがて誓を立て、

「眞實御謹慎とあらば、この鐵太郎、不肖ながら必ず上樣の御精神を朝廷に貫徹いたしまする。恐れながら、この鐵太郎の眼の黑い內は御心配遊ばされまするな。」

と述べて御前を罷り出で、一二の重臣に相談したが、いづれもこの度の使命の目的は到底達せられぬものと思つて、しみ〴〵と相談に乘らぬ。そこで、この上は軍事總裁の勝海舟に相談するより外はないと思つた。

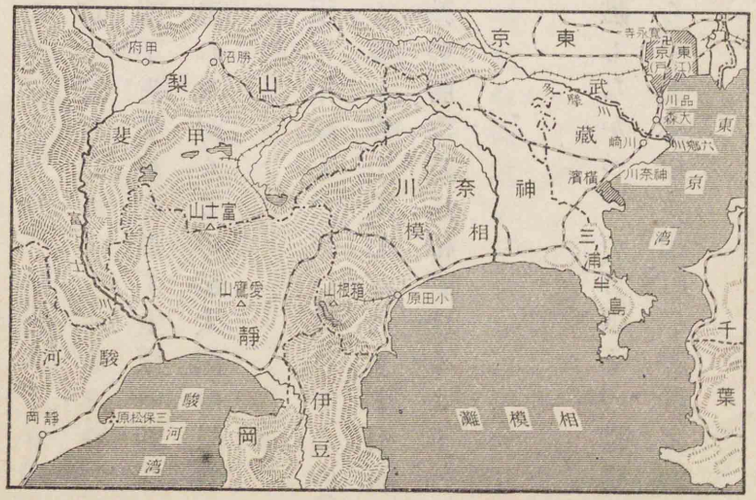
三

鐵舟はこの時まで海舟とは一面識もなかつたが、日頃その膽略の尋常でないことを聞いてゐたから、早速赤坂氷川町の勝邸を訪うて面會を求めた。

大久保一翁名は忠寛、舊幕臣、子爵、元老院議官、明治二十一年歿、年七十二

海舟はかねゞ鐵舟の穩かでない風聞を聞いて居り、又大久保一翁からも「山岡は君を殺す考かも知れぬから、決してあの男には會ふな。」と警告されて居るので、鐵舟來訪の旨の取次を聞いて、躊躇したが、家人が面會を謝絶し兼ねて居るのを見て、一先づ座に通した。やがて面會して見ると、なるほど豫ねて聞いてゐた通りの言語動作、尋常の男でない。鐵舟は平氣で海舟の前に出て、

「この度上樣の命によつて大總督府に往くに就いては、緩々貴殿



大喝　大聲で叱りつけること

に相談いたしたいと思つて參つた。」

と挨拶した。

しかし、海舟はこれを聞流して容易に應じさうもない。すると、鐵舟は大喝一聲、

「御身は軍事總裁ではないか。何とかよい思ひ付きもござらう。この期に及んで何をぐづ〳〵考へられるか。」

と責めた。この時海舟は始めて口を開き、

「さらば、貴殿はこの際幕府の執るべき方針を如何に考へられるか。」

と問ひ試みると、鐵舟は言下に、

「もはや幕府の薩州のと、そんな差別はござらぬ。擧國一致ぢや、四海一天ぢや。」

と答へた。

生靈　人民

今まで疑惑の雲に覆はれてゐた海舟も、この一言を聞いて、鐵舟の朝幕に對する意向を知り、胸中の疑雲が一時に霽れたので、更に、

「さらば、官軍の陣營に往く手段はどうする御料簡か。」

と聞いた。鐵舟は固より豫ねて期する所があるから、聲に應じて、

「官軍の營中に往けば、敵は自分を斬るか縛るかする外はござらぬ。かゝる場合には、先づ兩刀を彼に渡し、縛るとならば縛らせ、斬るとならば斬らせ、何事も彼方に任せて處分させる料簡でござる。けれども、縱令敵人だからとて、是非を言はせず殺す筈はござらぬから、使命を果すことは困難ではないと思ふ。」

と答へた。

鐵舟のこの一語には、江戸百万の生靈を助けようとする至誠、且は百雷が一時に落來ても敢て動ぜぬ大精神が仄見えてゐた。海舟は聞終ると、手を拍つて喜び、

愚痴　おろかなこと

六郷川　川崎市の北を流れて東京灣に入る川

「それで安心いたした。實は貴殿とは今日が初對面であるが、日頃貴殿の噂を承つて、お目にかゝりたいと思つて居つた。けれども、山岡といふ男は謀叛をたくらんで居るといつて、時々注意してくれる人もあり、就中大久保一翁の如きは、内々自分に對して、『山岡は決して近付けるな、あの男は君を殺す所存ぢや。』と警告してくれるやうな次第で、彼是愚痴に引かれて、神ならぬ身の失禮いたした。併し、今日お目にかゝつて、忽ち日頃の疑問が解けたから、必ず惡しからず御諒承を願ひたい。只今の御決心を承るに、よもや仕損じはござるまい。一刻も早く大總督府に往つて、目的を貫徹して戴きたい。」

御承知不ス

さて、鐵舟は愈、江戸を出發し、品川・大森を經て、六郷川を渡ると、官軍の先鋒は既に此處まで押寄せ、街道の左右には嚴めしく武裝した銃隊が林のやうに立並んで、今や江戸に迫らうとする有樣であ

つた。

鐵舟は一身の生死は固より顧みる所でない。たゞその心に誓ふ所は、天の道に違はぬ一事だけであつた。それゆゑ、虎口にも似た官軍の銃隊の中を歩くのにも、英氣は百万の軍を壓し、一點恐懼の念もなく、坦々たる平野を往くやうであつたので、誰一人として敢てこれを咎める者はなかつた。そればかりでなく、隊長の營所と思はれる前に行くと、案内も乞はずつか〳〵と營所に入つて、隊長篠原國幹に面會し、言葉爽かに、

「朝敵德川慶喜の家來山岡鐵太郎、急用があつて大總督府に參るのである。」

と斷つた。百人ばかりの兵士は何れも聲を出さず、ひたすら鐵舟の風采・態度を見詰めて居るだけであつた。

鐵舟が篠原の營所の前を通り過ぎて間もなく、薩摩の雄將村田

英氣　すぐれた氣性

篠原國幹　鹿兒島藩士、陸軍少將、西郷隆盛に與し、西南の役を起した。明治十年歿、年四十二

村田新八　鹿兒島藩士、西南の役に隆盛を輔けた、明治十年歿、年四十二

新八・桐野利秋の兩人は、幕臣山岡鐵太郎が傍若無人の振舞で官軍の陣營を過ぎたといふことを聞いて、その後を追うたが、この時鐵舟は早くも神奈川方面に行つて居つて、影も形も見えなかつた。

神奈川驛以西は長州の兵で滿たされ、驛に入る前後には番兵を置いて見張らせ、手嚴しく往來の人を訊き質して居つた。鐵舟は隨行者益滿を先立たせて、自らはその後に從ひ「薩摩藩士」と名乘を上げて通過したところ、到る處の大驛小驛は何れも禮を厚うして難なく通過させた。

かうして、鐵舟が小田原に着した頃、街道に澤山の人々が集つて、互に戰爭の始まつた噂をしてゐた。鐵舟はこれを聞いて、その人人に向つて、それとなく、

「何處で戰爭が始まつて居るのか。」

と聞くと、

桐野利秋　鹿兒島藩士、陸軍少將、西南の役に隆盛を輔けた、明治十年歿、年四十

益滿　名は新八郎、薩摩藩士

人をはゞからずふるまふこと

「甲州勝沼のあたりで激しい戰がござりまするさうで……。」と答へた。鐵舟はこの心安からぬ答を聞いて、心竊に「さては甲州に脫走を企てた近藤勇がいよ〳〵戰端を開いたか。」と合點して、晝夜兼行、足早に駿州靜岡に着いた。

近藤勇、名は昌宜、武藏國の人、劍客、幕府に仕へ、新撰組の長となつた、明治元年歿、年三十五

有栖川宮熾仁親王

大總督府は靜岡傳馬町の廣大な家を旅營とし、有栖川大總督宮を始め奉り、參謀西鄕隆盛以下の幕僚が控へて居る。作戰の參謀本部である。鐵舟は先づ來意を告げ隆盛に面會し、海舟の手紙を渡して後、

有栖川宮、名は熾仁、御名は熾仁、陸軍大將、明治二十八年歿、御年六十一

「貴下がこの度朝敵を征伐なさる御趣旨は、是非を論ぜず進擊なされる御所存であるか。」と聞くと、隆盛は一言の下に、

西鄕隆盛、通稱は吉之助、號は南洲、明治維新の功臣、陸軍大將、明治十年歿、年五十一

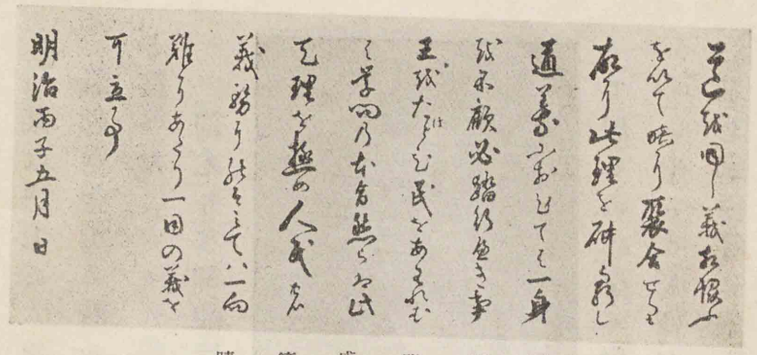
「某は決して人を殺し國家を騷がせる考は持つて居らぬ。唯騷動を企てる者を討鎭めるばかりである。」と答へた。

「御尤もな御趣旨。さらば、我が主慶喜既に寬永寺に閉籠つて謹愼いたし、生死の程は朝廷の御沙汰に任ずる今日、何の必要があつて進軍なさるか。」

西鄕隆盛

「慶喜が一向に朝廷の御趣旨に背かぬ者とは思はれぬ。近藤勇が甲州に立籠つて官軍に敵對して居るのは、全く慶喜に謹愼の誠意のない證據でござる。」

「いや、さうではござらぬ。我が主慶喜は自ら謹愼・恭順の實を示し、家臣等に嚴しく謹愼すべき旨を命令致されたが、數多い家



西郷隆盛筆蹟

道を同し義相協ふを以て暗に聚合せり、故に此理を研窮し道義においては一身を不顧必踏行べき事、王をたふとび民をあはれむは學問の本旨、然らば此天理を極め人民の義務にのぞみては一向難にあたり一同の義を可立事

明治丙子五月　日

臣の中には、我が主の命令に背いて脱走し、或は反旗を飜す者もござらう。けれども、かゝる鼠賊は既に徳川家とは絶縁した輩で、我が主の一向に御承知ない所でござる。甲州の一揆もかゝる鼠賊の企と思ひまする。さればこそ、某が主慶喜の誠心を朝廷に言上いたさなければ、主慶喜も脱走の鼠賊輩と一樣に視られることの本意なさに、虎口を逃れて當御陣營に推參いたした次第。何卒大總督宮殿下に然るべくお執成をお願ひいたしたい。」

と述べた。事の仔細を聞いても、隆盛は容易に大總督宮に執成す氣色がない。そこで、鐵舟は更に、

「かうまで某が主人の意を傳へ禮を盡すにも拘らず、參謀に於て一向お構ひなく、何處までも御征討なさるとあらば、この山岡鐵太郎は申すに及ばず、旗下八万騎は命を賭けて益、官軍に敵對いたし、天下は愈、亂れるばかりであるが、それでも參謀は天下の亂を鎮めるためといはれるか。抑、天子は人民の父母でいらせられる。是非を明にし、不逞の徒を御征伐あらせられてこそ眞の王師と申すべきである。然るに、朝命に背き奉らずと申す忠臣に對して、特別の御處分がなければ、天下はいやが上に大亂を惹き起すことと思はれる。偏に參謀の御考慮を煩はしたい。」

と理を盡し情を盡して、淀みなく説立てる言葉には、流石の大西郷

不逞　我儘な振舞をすること

もしたゝか感じ入つて、

「先日は靜寛院宮（仁孝天皇の皇女和宮、德川家茂の室、明治十年三十二歳、御年三十六年歿、十八の室、明治十四年歿、天璋院島津齊彬の女、德川家定の室）、天璋院（しんしやうゐん）殿の使者が來られて、慶喜公の恭順の次第を述べて歎願せられたが、何れも狼狽（らうばい）の體（てい）で話の條理が一向に立たず、かねぐ〜不審に思ふ折柄、貴殿の御入來によつて、江戸表の事情も判然いたしたから、事の次第を大總督宮に言上仕り、改めて御挨拶いたすから、暫く此處で御休息あらせられたい。」

と言殘して、隆盛は直ちに宮に伺候することになつた。

五

やゝあつて隆盛は再び出て來て、「宮から五個條の御書付を頂戴いたした。」と言ひながら、その書付を鐵舟に示した。その書付には次のやうに認めてあつた。

一、江戸城を明渡す事。

一、城中の人數を向島へ移す事。

一、兵器を渡す事。

一、軍艦を渡す事。

一、德川慶喜恭順の廉（かど）を以て備前に預くる事。

隆盛は更に鐵舟に向つて、

「右の五個條さへ御實行相成らば、德川家寛典の御處置もござりませう。」

と述べた。鐵舟は聞終つて、

「五個條の中、一個條だけは某が引受けかねまする。」

といふと、隆盛は、

「その一個條は何れでござるか。」

と、けゞんの體（てい）。

「主慶喜を備前に預けることは、到底承服いたされませぬ。こ

寛大な恩典所置

承知してその旨にしたがふ

けゞん ふしぎ

兵端戰のいとぐち

ればかりは、豫ねて恩顧を蒙つた德川の家臣が何れも承服いたしかねる儀でござりますする。これがために兵端を開き、數万の生靈を殺すことは、王師の執るべき道ではござりますまい。」

といふと、聞終つた隆盛は頑として、

「けれども、これは朝命であるから致方がござらぬ。」

と言放つた。しかし、鐵舟は固く執つて、

「たとひ朝命であるからとて、この儀ばかりは承服いたされませぬ。」

と答へた。隆盛もまた固く執つて、

「これについて如何に言はれても、朝命であるから如何とも致方がない。」

と斷言した。そこで、鐵舟は、

「然らば、假に貴下と某との位置を易へて考へて戴きたい。若し貴下の藩主島津公が誤つて朝敵の汚名を受けられた場合、官軍征討の前に當り謹愼恭順されたにも拘らず、他藩に幽せられることになつたらば、貴下は甘んじてこれを御承諾なさるか。」

と問うた。隆盛はこれを聞いて、暫く默然と考へ、やがて、

「御尤も千万なお言葉然る上は、この吉之助及ばずながら德川慶喜公幽閉のことだけは沙汰止みと致すやう取計らひまする。」

と、書を認めて誓約した。

かうして談判がいよ〳〵結了した後、隆盛は打寛いで鐵舟に向ひ、微笑を漏らしながら、

「大兄この度官軍の陣營を破つて、この大總督府に來るといふ傍若無人の振舞、實は捕縛すべき筈であるけれども、これは容赦いたしまするぞ。」

と戲れると、鐵舟も透さず、

「捕縛されるのは某が豫ねての覺悟、一刻も早く御處分を願ひたい。」

といふ。隆盛は呵々と打笑ひ、

「それよりは寧ろ一盞を献じませう。」

といつて酒を命じ、肝膽相照らしたこの兩雄は、微笑低酌、一見殆ど舊知のやうに、互に赤誠を披瀝して語りあつた。（山岡鐵舟）

肝膽相照らす　互に心を知合つて親しく交る

披瀝　心に思ふことをつゝまず出す

二八　全生庵

兒玉花外

春風花を咲かせ人を覺ます
東京下谷の谷中全生庵に
明治維新の偉傑功臣、
膽と劍に一代を鳴らしたる
山岡鐵舟の墓と碑は立てり。

兒玉花外　名は傳八、山口縣の人、明治七年生、詩人

白き木蓮の花燻きて、
一劍禪士の墓碑への道しるべ
その昔名物菊の團子坂を通れば、
蒼苔古くして聳え立つ全生庵。
快燕空にひるがへり切る十字。

櫻に埋れて白し鐵舟の墓。
若葉に蔽はれて碑の影は
靄然として潔し膽のすがた。
日に月に雨にもこの庵寺の境内
極と情とを強くも添ふるかな。

大日本の凡べてが浴ぶる春なれば、
此處なる石と花とは契りつゝ、
まことごころを濃く露はせり。
おゝ、時に氣に觸れて熱あり石と花。
現代の活きたる人に血は躍らずや。

山岡鐵舟の墓

品川彌二郎　長州藩士、子爵、明治三十三年歿、年五十八

鳥尾得庵　名は小彌太、長州藩士、陸軍中將、子爵、明治三十八年歿、年五十九

北垣國道　京都の人、男爵、大正五年歿、年八十一

滴水禪師　丹波由利氏、禪僧、國の人、明治三十二年歿、年七十八

至誠回天の力、
品川彌二郎・鳥尾得庵・北垣國道等の豪傑共と、
巨僧滴水禪師の嗣法を受けたる
鐵骨稜々たる隨一人山岡鐵舟。
骨は朽ちても虎より尚猛なり心氣精力。
幕末當時江戸の名物二人男、
山岡鐵舟と勝海舟、
今も國を憂ひ愛する勇しさ。
二舟の悠々と行くが如し雲と雲、
感激刺激あふるゝ春や日本の空。

劍と禪と書と三拍子揃ひて
一人に兼ぬる日東帝國の山岡鐵舟。
春は櫻の匂ふ明るき近世史。
見よ、滔々刹に奔り恥を知らぬ輕佻を
鎮めて清むる真の男に重き墓石。

二九　幕末論

福地源一郎
號は櫻痴、長崎縣の人、舊幕臣、文學者、明治三十九年歿、年六十六
前將軍家德川慶喜
伏見・鳥羽ともに京都府紀伊郡、京都市の南、明治元年正月官軍とこゝで幕軍の戰があつた

前將軍家は勢に迫られて、伏見・鳥羽の戰を開くに及びたれども、戰亂は素より其の志にあらざりしかば、恭順謹愼の念は既に大阪城を出でたる時よりして定まりたるものか。但し、伏見・鳥羽の戰に、幕兵が散々に擊破せられて退きたること、實に天運の然らしめし所なりとは云へ、抑、出兵の策宜しきを得ざりしによると言はざるべからず。

山崎
京都府乙訓郡
會桑
岩代國會津藩と伊勢國桑名藩

福地源一郎

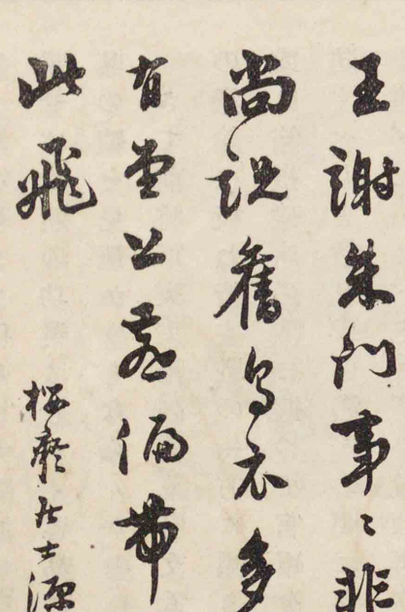
此の時に當り、京都に在りし薩長の兵は慓悍なりと雖も僅に數千に過ぎず。討幕の密勅は薩長の臍を固めしめたりと雖も、他の諸藩は依違の間に在り。幕府依然として大阪に據りて自重し、海には其の軍艦を攝海に繫ぎて、西南よりする通路を塞ぎ、陸には兵庫の關門を鎭し、淀川の水路を阨し、山崎其の他の要所に護兵を配布して、以て諸方の連絡を斷たば、京都は宛然敵圍の中に在るが如き形勢となり、薩長の懸軍は死地に陷り、戰はずして自ら潰ゆべかりしなり。之を幕府の爲の上策とす。然れども、勅使頻りに下りて、前將軍家の上京を促され、これを推辭する能はざりしとならば、前將軍家は斷然汽船に投じて東歸せられ、大阪城の留守を會桑に託して前策を行はしめらる

べかりしなり。之を中策とす。此の兩策とも行ふべからずして、必ず京都に攻上り、以て一戰に薩長の兵を破り、君側を清むべかりしならば、全軍の力を集めて一擧直ちに山崎街道に向ひ、鼓譟して京都を突くの策ありしのみ。之を下策とす。かの狹隘なる路に向つて兵を分配し、側面の攻擊を意とせず、加ふるに數隻の軍艦を有し、海軍に於ては全國中幕府に敵すべき諸藩なき好地位に在りながら、斯かる無策の軍略を行ひたること、苟も兵を談ずる者の必ず幕府の爲に奇怪の思を爲す所なりとす。當時幕府の將校中豈に此の觀易き兵理を知る者なからんや。然り而して其の言の行はれずして、かの無策の出兵に歸したるは何ぞや。他なし、幕府が恃むべからざるを恃みたるが故のみ。幕府の當路者思へらく、「薩長の兵數千、敢て恐るゝに足らず。前將軍家の大旗一たび京都に向はば、他の諸藩は靡然として幕府に隨從し、薩長の孤軍は戰はず

王謝朱門事々非、城南尚說舊烏衣、多情只有堂上塵、偏帶秋風一向此飛

櫻痴居士源

して潰散すべし。在京の諸藩亦皆戈を倒さまにし銃を後にして、背後より薩長の兵を攻擊し、以て幕府に應ずべし。砲聲一たび伏見・鳥羽に聞えんか、洛中處々に火の手擧りて、敵は前後挾擊を受くるに至らん。兵略の如何は敢て問ふを要せず。」と。現に幕府諸老は出兵の方略を論じたる將校に向つて、往々之を公言して憚らざりき。蓋し京都內應の事は、之を幕府に內議して密約せる輩あり一しを以て、幕府は輕々しく之を信じたるなり。若し幕府にしてか



福地源一郎筆蹟

箱根　伊豆・相模・駿河三國の界
碓氷　上野・信濃兩國の界
東山道　畿内から東方山間の諸國を通つて奥羽地方に至る道

の上策を執つて徐ろに大阪城に自重せば、維新の功業はしかく容易に其の績を見難かりしならんか。

さて、前將軍家東歸の後、幕府文武の議論は概ね皆主戰の一方に傾き、或は箱根・碓氷の險に據つて官軍を防ぐべしと言ひ、或は濃尾の間に兵を進めて戰ふべしと言ひ、或は再び東海・東山の兩道より大擧して京都に攻上り、海軍と相應じて大阪城を恢復すべしと言ひて、軍議紛々たりき。然るに、前將軍家が固く恭順の議を執りて動かざりしが故に、幕議は終に謝罪降伏とは決したるなり。此の時に際し、若し幕軍

伏見・鳥羽の戰（名和永年筆）

ナポレオン（1808—1873）交趾支那牛島（印度支那半島）の東南部一體の地

民部大輔　慶應三年パリ博覽會に派遣せられた、明治四十三年歿、年五十八

防戰と決したらんには、勝敗の決逆覩し難く、隨つて其の戰亂は延いて數年に亘り、全國の蒼生必ず塗炭に苦しみしならん。

加之、當時最も恐るべかりしは外國の干渉なりき。佛帝ナポレオン三世漸く東西に志あらしが、之を交趾に試み、之をメキシコに試みて、其の意の如くならざりし折柄と云ひ、加ふるに、當時前將軍家の弟民部大輔佛國に在りて大いに帝の優待を得たりしかば、幕府の士大夫の中には、竊に佛國の應援に依賴し、其の兵力を假りて以て薩長其の他を平定するの議を首唱して、幾分の勢力を占めんとするに至れる者もありしをや。若し此の議にして行はれたらんには、日本帝國の金甌はために永く一闕を生じて、不測の禍源となるべかりし

徳川慶喜

なり。

然るに、前將軍家は斷乎として斯かる邪議を却け、只管に恭順を表して動かざりき。其の一身の生命を犧牲にし、又德川氏の存在を犧牲にして、專ら國家の幸福と國民の安寧とを望みたるは、決して尋常の思想にあらざりしこと知るべきなり。然らば則ち、前將軍家は德川氏滅亡の際に臨みて、能く其の終を全うせしめたる明將軍なりと言ふべきにあらずや。

嗚呼、源頼朝が始めて幕府を刱立せしより七百年、其の間、武門にして政權を掌握して天下を治めたる者、曰く源氏、曰く北條氏、曰く足利氏、曰く織田氏、曰く豐臣氏、曰く德川氏。而して其の滅亡の時に於ても、國家の爲に國民の爲に其の社稷を犧牲にしたる者は、獨り德川氏あるのみ。如何ぞ特筆せざるべけんや。（幕府衰亡論）

曾我殿
名は祐信

一万
曾我十郎祐成
箱王
曾我五郎時致
母
名は滿江

三〇　空行く雁

新玉の年立返りて、一万は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「如何に母御前、父御前はいづくにおはしますぞ。誠にや、人の語るは、『父御前は佛になりてまします。』と。その佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや、母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙に忘れたる來し方も今更思ひ出されて、消入るばかりに思はれて、母泣く〳〵宣ひけるは、「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」と、心強く語らひければ

曾我兄弟（歌川廣重筆）

工藤一臈
名は祐經

鎌倉殿
源頼朝

この里
今の神奈川縣
足柄下郡下曾
我村

も、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。　箱王かさねて申しけるは「父御前は、まことやらん、『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一臈とやらんに射られて死に給ひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。」　當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。　我等をも殺さんとや思ふらん。　我等この里にありと知らでや過ぐらん。」など、おとなしく語りければ、母より始めて、女房達まで皆袖をぞ絞りける。

斯くて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟ふたり庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南を指して飛びけるを見て、一万申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。　空を飛ぶつばさも皆別のつばさを交へざりけり。　五つ連れたる鳥のうちに、一つは父、一つは母、殘りの三つは子どもにてぞあるらん。　物言はぬ鳥類すら斯くのごとし。　我等は人倫に生れながら、和殿は

河津殿
名は祐泰

弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。　我等が父をば河津殿と申してありきとかや。　父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。　我々より幼きものにても、馬鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨しさよ。　これらのことども思ひつゞくれば、いつよりも今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。　一万の乳母の女房これを聞きて、「あな、あさまし。　人もこそ聞

母に制せられぬる曾我兄弟

に入りにけり。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、たゞ目ばかりを見あはせて、互に袖をぞ濡らしける。未だ十歳にも滿たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射通し

曾我兄弟の墓

け。いかに和上藹達、夜も更けぬるに、などさやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と、怖しげにいひければ、二人のものは門外に逃れ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内

て、一万、箱王に申しけるは「我等もいつか成長して、和殿十三、我は十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一つの能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひける間、或人一万が乳母に此の由を語りけり。（曾我物語）

三一　聖上崩御

大正十五年十二月二十五日、聖上陛下には葉山御用邸に於て崩御あそばされた。吾等はこゝに吾等七千万の國民にとつて最も悲しむべく最も痛むべき國家の最大不幸に遭うた。

大行天皇は天性至仁に渡らせられ、明治天皇の遺烈を繼いで大

○この文は大正天皇崩御直後の作である

統を承けさせられてから、專らその大御心を基として政を統べさせられたので、万民悅服、皆その御德を頌し奉つてゐた。然るに、陛下には大正十年十一月二十五日、久しきに亙る御疾患により大政を親らせさせ給ふこと能はずとの御理由で、皇太子裕仁親王殿下を攝政に任ぜられ、專ら玉體を保養して御回復を期し給ふ旨を宣布せられた。爾來國民は天地神明に祈願して、陛下の一日も早く御回復あそばされることを冀うてゐたのにも拘らず、その後の御容體はとかく捗々しからず、常に一進一退の御狀態を脫せられず、終に大正十五年十一月十一日、御風氣のため御發熱あそばされた旨が宮內省によつて發表され、同時に、皇太子殿下が九州に於ける大演習御統監のための行啓の御豫定を俄にお取止めになつた旨が發表された。陛下の御不例の御看護につき、皇后陛下・皇太子殿下・同妃殿下の御心盡し、その他竹の園生の各宮殿下の御奉仕は、吾

等の恐懼して止まぬ所であつた。その御心盡しや御奉仕を承るにつけ、國民の赤誠は火と燃えて、霜を履み、水を浴びて、人皆ひたすら陛下の御快癒を祈り奉つたのであつたが、この國民的祈願も遂に空しく、こゝに聖上崩御といふ國家最大の不幸に遭うたのは、何といふ痛恨事であらう。

伏して惟ふに、大行天皇の御治世十五年は、必ずしも長いとは申上げられぬ。併し、この十五年間の歷史が頗る異彩を放つたものであることは、恐らく誰も異議を挿まぬであらう。即ち大正三年には世界大戰に參加して對獨宣戰の事があり、次いでヴェルサイユ(Versailles)の講和會議、ワシントン(Washington)の軍備制限會議、及びその後引續いて開かれた國際聯盟會議など、國際政治上重大な意義のあつた諸會合に於て、吾が國が重要な地位に立ち、且偉大な勢力を有するに至つたことは、實に吾が國の歷史上空前の事實である。單に此等の事

實だけを見ても、如何に大行天皇の御治世が精彩に富んだものであつたかが窺はれるのである。

併し、大正の御代も決して追風に帆を揚げるやうな順境にばかり立つてはゐなかつた。即ち大正十二年の關東地方に於ける大地震・大火事の如きは、國家的逆運の最も著しい例である。數十万の生靈を犧牲にし、幾十億の財貨を燒き盡した大震火災の物質的損害は言ふまでもなく、當時に於ける人心の不安の如何に大きかつたかは、今猶吾等の記憶に新しい所である。而も此等精神的並に物質的打擊に打勝ち、二三年にして終に今日の如き國家の隆昌を見るに至つたのは、一に大行天皇の御聖德によるといふの外はない。その上、世界大戰以來世界的思想の激變に際し、吾が國民は實に振古未曾有の精神的試練に會うたけれども、而も能くその試練に堪へて、世界に比類のない國風を維持し、顯揚し、國礎をしてい

よいよ强固ならしめ、その間國民の社會生活に多くの不安を感じさせることがなく、時勢に適應した施設をなしたことは、實に大正年間に最も光輝のある一面であるが、これまた實に大行天皇の御仁德の現れと見るべきである。就中万機公論に決するといふ明治天皇の五箇條の御誓文の御趣旨を御擴充あそばされて、普通選擧法を御公布になつたことは特筆大書すべきである。

申すも畏いことではあるが、大行天皇は、御幼少の時から優れた御體質の御持主ではおはさなかつたやうである。その御身を以て、多端な國務に御盡瘁あそばされたことが、著しく御健康を損ぜられた原因であつたやうに拜察される。それだけに、吾等は陛下の崩御に對する悲みを現すのに、如何なる言葉を以てすべきかを知らぬ。吾等は天に嘆き、地に哭して、こゝに臣民の至情を披瀝し、謹んで陛下の登遐を哀悼し奉る。

○あゝ遂に「聖上崩御」の四つの文字、
この曉の眼に入りしかな。

尾上八郎

○呉竹の葉山の宮に千代ませと、
八千代にませと祈りしものを。

佐々木信綱

現代國語讀本　卷五　終

現代國語讀本

大正十二年十一月廿七日印刷
大正十二年十一月三十日發行
大正十三年一月一日訂正再版印刷
大正十三年一月四日訂正再版發行
大正十五年十月二十日修正三版印刷
大正十五年十月廿三日修正三版發行
昭和二年二月一日訂正四版印刷
昭和二年二月四日訂正四版發行

現代國語讀本
卷一—二金四拾七錢
卷三—六金四拾六錢
卷七—十金四拾參錢

著作者　八波則吉
發行者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社東京開成館　代表者　松本繁吉
印刷者　東京市千込區榎町七番地　竹内喜太郎
西部販賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町七番地　林平次郎

發行所
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社　東京開成館
振替貯金口座東京第五三二二番

昭和五年度臨時定價　金七拾五錢
昭和四年度臨時定價　金六拾六錢

（日清印刷株式會社印刷）

[redacted]

東京帝國大學圖書館

広島大学図書
2000090694